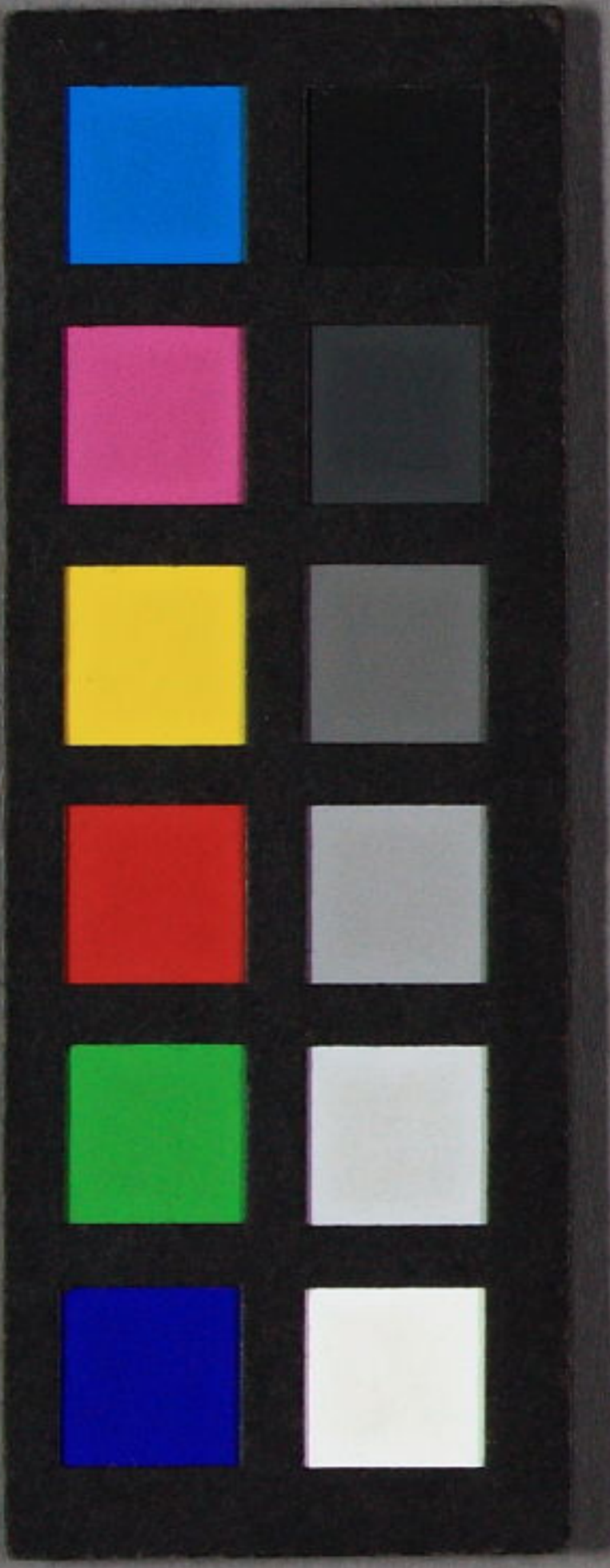


名譽新志

下



5
44
3

明治九年十一月

中根雪江君ノ事蹟

和田壽賀女志ヲ立テ、學問ニ勉強スル記事

獨逸人「クロツプ」氏ノ大工業ヲ起セシ記事

名譽

新誌

第二十號

中根雪江

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌ト相反シ名譽ヲ妨害スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ識リ勸懲ノ一端タランヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニノ報告ヲ賜ハ幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十號

中根雪江君ノ事蹟

君ハ越前福井ノ人ナリ名ハ師質通稱ハ鞆負トイフ退隱ノ後ニ號ヲ以テ名トセリ文化四年丁卯七月三日生ル父ハ孫右衛門衆諸母ハ平本氏ナリ世々本藩ニ仕ヘテ七百石ヲ食ム幼キヨリ聰明ニシテ文學ノ志シ厚ク藩ノ儒者高野某ニ就テ學フ壯年ニシテ藩ノ用人ニ舉ラレ後チ擢テラレテ中老トナル屢々江戸邸ニ在勤セリ叔父渥美新右衛門ハ詩歌ヲヨクスル人ナリシカ君ノ年若クノ學オアルヲ識リ平田厚胤ノ門ニ誘導セシヨリ國學ニ志シ博ク古典ニ涉レリ實弟平本良載モマタ

和漢ノ學ニ通シ兄弟和睦ミ志ヲ一ニシ深ク皇室ノ衰ヘ綱紀
ノ弛ヘルヲ歎キ藩士ヲ勸テ勤王ノ志ヲ勵マス是ヨリ士風大
ニ振ヒ興ルトソ

嘉永六年癸丑六月亞米利加使節「ペルリ」其國大統領ノ書簡ヲ
齎シ來テ和親貿易ヲ請フ時ニ幕府其齎ラス所ノ國書ヲ諸侯
ニ示シ各自ノ意見ヲ問フ時ニ諸侯伯開港ヲ是トスル者鮮ナ
ク概テ皆ナ鎖港攘夷ノ論ニシ物情騷然タリ君或ル日春嶽公
ノ前ニ伏テ曰ク臣情々世ノ形勢ヲ見ルニ今ヤ國家艱難ノト
キニ際シ禍ヒ爰ニ萌芽セリ天下皆ナ鎖港ヲ主張シテ其勢ヒ
實ニ止ム可カラス臣ノ見ハ甚タ之レト異ナリ依テ試ニ我

皇帝陛下ヨリ米國大統領ニ答ル書牘ニ擬スル一篇ヲ草セリ
是レ臣ノ志ノ存スル所口願クハ一覽ヲ賜ヘトテ懷ロヨリ一
書ヲ差出セリ其書ノ略ニ云ク特ニ亞米利加大統領ノ請求ニ
應シ我ニ三港ヲ開クヘシ歐州各國ヘハ米國ヨリ之ヲ通報シ
皆來テ貿易ヲ爲サシム可シ今鎖國ヲ變シテ開港ヲ許スニ於
テハ互ニ信義ヲ以テ交際ヲ厚クシ貿易ヲ盛ニシ歐米諸州ト
往來シ我ヨリモ公使ヲ各國ヘ欽差スヘシト云々コレ其大意
ニシテ其他ノ件々何レモ開明ノ說ナラサルハ無シ公閱シ終テ
冊ヲ掩ヒ沈思スルヲ良久ク莞爾トシテ曰ク汝コレヲ舍ケ
今日ノ勢如此慎テ世ノ嫌疑ニ觸ルコト勿レ速ニ之ヲ火ニ投

セヨト云テ其書ヲ返サレタリシ

時ニ將軍家定公薨シテ世嗣ナシ一橋慶喜公ヲ立テ嗣トセン
トスルノ内議アリ君固ヨリ水藩藤田虎之助戸田銀二郎安島
帶刀及ヒ薩藩有志ノ人等ト厚ク交リ公ヲ輔翼セラレタリ一
日公井伊大老ノ櫻田邸ニ詣リ將軍家ノ世嗣並ニ開鎖ノ事ヲ
京師ニ奏聞センコトヲ議スルニ其論自カラ合サル如シ歸路西
丸追手前ヲ過ルトキ君單騎ニシテ馳セ至リ鞍ニ伏シテ曰ク今
日水府老公尾州公ト俄カニ登城スト聞ク想フニ立嗣開鎖ノ
事件ナル可シ公何ソ其議ニ與カラサルヤ公曰ク予此事ヲ
知サルナリ實ニ知ラスト雖モ措ク可キニ非ス依テ直ニ馬ヲ

回ラシテ登城セラレシニ果シテ是日立嗣ノ議稍定マレリ
春嶽公人ニ語テ云ク予田安ノ館ヨリ當家ノ養子ト成リシ時
年甫テ十一歳ナリシ或ル日雪江予ニ告テ曰ク君ハ民ノ父母
ニシテ民ハ君ノ赤子ナレハ願クハ之ヲ虐ケ之ヲ欺ムコト勿レ
事ハ志ニ因テ成ル者ナレハ志ノ一字ハ常ニ之ヲ忘ルコト勿
レ上ハ幕府ヘ忠節ヲ盡クシ下ハ一國ヲ治メ衆庶ヲシテ安カ
ラシムルコト國君ノ職務ナリト其言ハ温ニシテ其事甚タ嚴ナ
リ今ニ於テ耳尚ホ歛タツ爾後予ヲ補翼スルコト始終一ノ如シ
「ペルリ」カメテ初内海ニ來ルヤ世論洵々タリ當時予モ亦鎖港
論ナリシニ雪江カ擬答ノ一書ヨク予ヲ提携スト謂フヘシ雪

江二十年前ニシテ既ニ眼ヲ全地球上ニ開キ蚤ク今日ヲ洞見シタル正ニ是ノ如シ重ク朝廷ノ拔擢ヲ蒙ルモ亦タ宜ナリ是レ予カ面目トナシ敢テ雪江ノ爲メニ誇言スルナリト云フ

君慶應三年丁卯十二月徵士參與トナル四年戊辰正月内國事務掛トナル二月外國人參内御用掛トナル同月大坂内國御用掛トナル同月内國掛分課民政宿驛助郷等取扱ヲ命セラル三月宿驛掛ヲ免セラレ租稅掛トナル五月三日召ニ依テ參朝シ小御所ニ於テ 龍顏ヲ拜シ畢テ徵士參與職ヲ免セラレ褒書及ヒ恩賞トシテ赤地金襴三卷御印籠一御盃三ヲ賜ハル藩ニ歸リ再ヒ隱居ス明治二年己巳九月二十六日賞典祿永世四百

石ヲ賜ハル明年四月舊藩主モ亦賞典祿ノ内百五十石永世之ヲ頒ツテ今ハ越前國坂井郡宿浦ニ退棲シ悠々日ヲ送ルト云フ

○和田壽賀女志を立て、學問ニ勉強するの記事

濱町「丁目の湯屋渡世鱗とく方にて去る十六日の夜家業も仕舞ひ、那處彼處を掃除せし折り女湯の戸棚に緋縮緬の守袋がありしゆへ早速近所を聞合すれど持主も知れざれば夫く立會の上へ改め見ると沼津の産和田傳三郎妹壽賀女に(十六年)兄傳三郎よりと記し妹を勵し勸むる書面二通や寫眞畫二枚(裏に父や兄の名か記してあり)外に血を濺ぎし誓約書があるげりゆへ見る人くも其の様子を別らぬど書類の文面を見

て思えず感涙を流し其筋へ訴へんやせる折柄十八日の朝壽
賀女や名乗り尋ね來りて若しや先日彼様くの品が残りてを
あらざるかや尋る言葉に相違なければ守袋を取出し渡すと
請取り彼の少女を押し戴き大切な懐へ納め主人に向て我身
ハ駿州沼津宿の生よて去る明治七年十四才の折り父と別れ
七日くの佛事供養も果てし後母と兄とと暇を乞ひ聊の知る
邊を手寄りに出京し一つ橋内女學校へ入校し今日迄怠らす
勤學する身よあればいずれ休暇の日を見合せ必ずお禮に參
らんと厚く禮を述て歸りし有様ハ實に年端の也か忍女よハ
稀なる取り廻しかりと感ぜ忍むのハなかりしとぞ

誓約書

- 一私事御國之厚父母之恩を思今夜より一心生敵に學事勉強可致事
- 一學事よ入用も可有之間衣服飲食節儉致し凍餒不致を以て度々致す事
- 一母兄の許可無之間ハ天地神明に誓ひ命を捨男を禁し候事
- 一日本國ハ勿論西洋外國迄名を知られ誠實而已生涯修行致し世を救ひ千歳の後よ名を揚げ候事
- 此之條々無相違貫徹可致候事

明治七年三月八日

和田 壽賀女(血判)

賢翁靈神

右を報知新聞に載せたり因て尙其詳なることを探訪するも
壽賀女を柔和正直の生質よみて能く物事を勉強せりとの春
女學校に入りてこのかた和洋の學問ハ勿論算筆針仕事に至
るまで何れも勉強し夫れく高級に登りし中にも洋算ハ最早
卒業せんやするよして學校引け後ハ近傍の同學友達や
打寄り其日學ぶ所を復習して空しく時間を費せしことをなし
や初は故郷に在りし時も學問の心懸け厚かりしが固より僻
地のことをなれば良き師匠の乏きを歎き一日不斗其母兄も願
ひ遊學の暇を乞ひ立ち出てしやき若し學問成らざれば再ひ

拜顔せずと盟を立てしとぞ彼守袋の誓約書も全く自分の志
と記すに迄として不計る世に洩れ聞へたを深く心も慚ち
居たれよし嗚呼壽賀女の志を立つた此の如し世の年少き婦
女の淫風浮薄なるものと雲泥萬里の相違よて他日の成業想
いやおべし又聞く其兄傳三郎ハ當時戸長を勤む壽賀女其庭
訓の嚴なれを受け志行の素あれを見るもたれ併しおがら
志ハ中ごろよして變し易く業ハ半バよして成り難きものさ
れハ益く此志を堅くし勉勵怠らず他日の成業を期し其名譽
を再い此の新誌に記載せんことを是れ今日より希ふとて
なり

○獨逸人「クロップ」氏の大工業を起せし記事

當時世界に隠れなき「クロップ」氏の大砲ハ獨逸國エッセン府ニ其製造場あり「クロップ」氏此業をばしえしより今まで二十五年の間ニ其業益々盛大を爲し當時二箇所の大製造所を起し一ハ一萬二千の職人を入れて大砲を製造し一ハ八千人の職工ニて小銃を打立て其盛大なるは一週日の暇を費さずれば場内の一般をも盡く見をわらずとぞ巨砲を鑄る場ハ十字形の厩舎をたて皆兩側ニ烘爐をもつけ十字の中央ニ鑄形をすへ千名も及ぶべき役夫ニ名々小銃車ととり爐口ニ向ひ整列せし是隊長指揮を傳ふれハ爐口百八十を開き中より精鋼を

熔したる小壺を引出し名々車ニ載せ走りて中央なる鑄形に注添す其狀火山の崩きとるかど疑ふほどなり(精鋼を熔け難きものふて二千五百度以上の熱にて僅に徑方七寸の鋼とどかす故ニ小壺ニあらさきを熔流ニ至らす)鑄成の後を別場ニ送り灰中ニ埋めたくと一二週日鋼質ますく熟し猶紅炎を吐く之を鍛ふよを五十噸の鎚を用ふ(五十噸を凡我邦の八萬餘斤よて千人力よて僅ニ運すべき巨鎚なり)之を蒸氣力よて上下せしめ其金敷をもふけるよを地を八丈の下まで鑿りいり次第ニ土石を固めあげたる地なれども運繩のときを近邊みち震ふ先年壞國ノ博覽會よを一千磅の施條砲を持出せり此

會かゝる大砲ハ只此人と魯西亞國と二ヶあるのみなりし「ク
ロップ」氏の兩製造場ハ利益をきくも毎年まいねんの會計工費並ひよ一
切の雜費を引去り二十餘萬磅（即ち我か百萬圓以上）ハ純益を
得ると當時エッセンの人口五萬餘ふ至り繁榮の府となりたる
ハ全く此の人の力に因り西洋より大なる製作場もあまた
有れども一日に二萬人の職工を雇ひ一ヶ年二百萬圓以上の
純益を得るハ唯此人の製作場一つあるのみと云ふ抑「クロップ」
氏がかゝる大製造をなし世界を驚かせしハ元來いかなる素
生の人かといへハ一千八百四十八年のころまでハエッセンも
一今の小村にて「クロップ」氏此より小き家屋を建て纔に六人の職

工を雇ひ鍛冶職を始め聊かの製作を爲し時々英國に往來し
商ひ素より家より餘分の蓄財もなき程なりしよ三十年前の比
より大砲製造を思立ち種々の經驗工夫を爲し遂に一種無類
の大砲を發明し製作したりしよ甚だ堅牢精良なるより大
砲世に重せられ「クロップ」氏の大砲といへバ誰れ知らざるもの
なきに到り二十餘年の間より大業といはししたり以前「ク
ロップ」氏か住居したる小屋を其儘にて修覆を加へ保存し其昔
を忘れずとぞ其場に至るもの舊時の家屋の矮小なるに今の
製作場の壯大なるとをみて實に勉強の光りハ世の中よりかく
も貴きものなりと感せぬものとしてハかといふ

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸

事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼

編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

博聞社

本局

加賀國金澤町

益知館

所	捌	賣
西京古門前三吉町	博聞分社	
大坂心齋橋通南 久太郎町南入	全分社	
千葉縣下寒川	全分社	
埼玉縣下浦和驛	全分社	
東京常盤橋前	全支店	
加賀國金澤上堤町	中村喜平	
同 安江町	近田太平	
同 堤町	野島信吉	



明治九年十二月廿八日

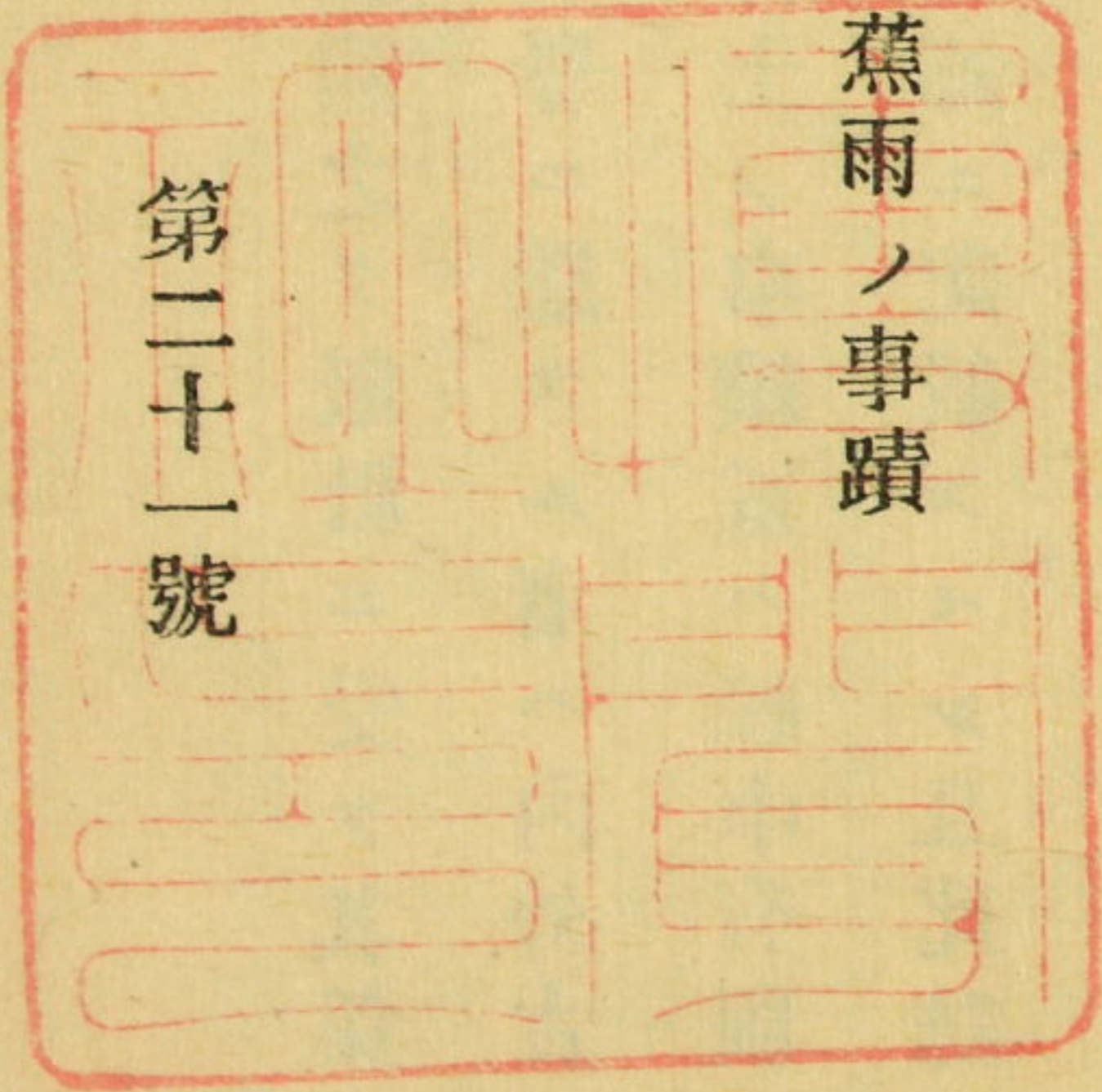
横山正太郎ノ傳 附吊詩

高杉新作ノ傳

武井柯亭翁ノ事蹟 附木村蕉雨ノ事蹟

池野藤兵衛ノ奇話

名譽新誌



第二十一號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第
廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古
今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限
ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌
ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ
希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ
識リ勸懲ノ一端タラシヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニノ報告ヲ賜
ハ、幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十一號

○横山正太郎君ノ傳

君明治三年七月廿六日書ヲ集議院ニ上リ時弊十條并征韓ノ
非ヲ論シ屠腹シテ死ス世或ハ之ヲ目シテ狂人トナス者アリ
彈正臺之ヲ聞キ則チ建言シテ之ヲ賞シ且招魂社ニ合祀セン
ト請フ官仍テ祭染料金百圓ヲ其家ニ賜フ藩主又金若干ヲ給
スト云嗚呼君ノ志愛國ノ至誠ニ發スル者ニシテ厚ク朝廷ノ
褒賞ヲ蒙ムル死シテ又榮アリ世ノ亂臣賊子ノ義ヲ忘レ身ヲ
亡シ臭ヲ千載ニ貽ス者ト豈啻霄壤ノ差ナランヤ余適マ感ス
ル所アリ仍テ西郷氏所撰ノ碑文ヲ以テ傳ニ易ユル左ノ如シ

○橫山安武碑文

橫山安武稱正太郎森有恕之四子母隈崎氏出繼橫山安容之後
 爲人忠實而泛愛衆事親有婉容愉色之養而至于事君則犯顏言
 人不能敢言者皆發忠愛之心矣安武在君側十余年排因習革
 舊弊且欲使宮中府中一體論辨不止其言一時能行而下情上達
 宮府無間隔者安武之功居多焉一日英艦來戰於鹿兒島港人家
 數百罹兵燹安武之家亦逢其災邦君每戶賜金以救其急安武
 以多年勤勞之功特蒙賞賜安武恤故人貧苦無資給者乘夜以賜
 金竊投於其家而去窮家不知其故踊躍以爲天神之冥助也安武
 死後親戚朋友檢其日記始知安武所爲嗚呼爲利不謀爲名不設

自發於至誠未聞如是人也安武任近侍專輔導公子孜孜不怠
 以爲成長於深宮恐疎下情切勸游學而自隨行焉有故召公子
 還安武亦從而歸藩則被奪其職於是反身曰當益勵志以脩德業
 耳再請遊學始到西京去又至東京當此時
 朝廷百官遊蕩驕奢而誤事者多時論囂々安武乃慨然自奮謂
 王家衰頹之機兆于此矣苟爲臣子者不可不千思萬慮以救之然
 而雖尋常諫疏百口陳之力不足矯正則无寸益而已不如一死以
 諫之若有所感悟豈無小補乎乃作諫書陳舊弊事十條持至集議
 院插之門扉退屠腹津藩邸門前實明治三庚午七月廿六日夜也
 拂曉門吏開門則有僵臥者以爲薩人也驚走告諸薩邸々吏到則

安武也扶起入邸氣息未絶曰奉書集議院語僅通乃遣人間之於院答曰今朝院門有封書上于

政府走歸具以其狀告安武安武如自得焉者而即瞑矣嗚呼以身當難安武平生言果不食也於是乎世人感安武之死諫空論忽止時弊亦以漸而改惜哉安武以忠實之資未能大有爲而爲史鱗之尸也噫

西鄉隆永謹誌(隆盛君 舊名)

○舊彈正權大忠稻津濟吊橫山氏詩

橫山是烈士意中有遠旨折檻徒爲耳直言分一死嗚呼千載下勵節誰能齒勿謂天下總萎靡日東尙出眞男子

○高杉新作ノ傳

君ハ長門國萩ノ人ナリ世々祿五百石ヲ食ム其人トナリ豪邁ニシテ奇材アリ少シテ放逸父ノ爲メニ逐ハル髮ヲ削リテ東行ト號シ江戸ニ行キ遂ニ洋船ニ乘テ火術ヲ英佛ニ學フ西人其敏警ナルヲ驚歎スト云フ業成リテ國ニ歸リ京攝ノ間ニ寓ス長州侯攘夷ノ詔ヲ奉スルニ及ンテ召シテ騎兵隊長トナス是時長兵陣ヲ馬關ニ張リ米佛二國ノ兵艦ト戰フ君髮ヲ蓄フル未タ長カラス恰モ栗殼ノ如ク白綸子ノ衣ヲ著シ古錦襪ノ袴ヲ穿テ手ニ蛇目ノ傘ヲ持テ足ニ高履ヲ履ミ馬關ノ妓六七名ヲ携ヘ高ク伊勢音度ヲ唱ヘ絃歌シテ營ニ入ル一營皆駭ク而

シテ兵氣之カ爲ニ振作ス赤根武人素ヨリ班其上ニ在リシニ
威權即日新作ニ歸ス癸亥ノ年長兵禁闕ヲ犯ス幕兵來テ其罪
ヲ問フ吉川監物長ノ爲メニ謝罪ス總督尾張大納言要スルニ
五事ヲ以ス曰ク侯ノ父子ヲ廢シ。脫走ノ五卿ヲ徒シ。暴動ノ三
大夫ヲ斬リ。山口ノ城塞ヲ毀テ。新徴ノ兵團ヲ解クヲ以ス。吉川
皆命ヲ奉ス是時奇兵金剛游擊等ノ兵團凡ソ百十一隊アリ六
万人ト号ス各解テ家ニ歸ル特リ奇兵隊三千人多ク諸國浪士
ノ組成スル所ナルヲ以テ令ニ服セサル者三百人アリ將サニ
之ヲ掩殺セントス君謀シテ之ヲ知り衆ヲ激シテ曰ク均シク
是レ死ス大丈夫盍ソ事ヲ舉テ死セサル衆踴躍シテ之ニ從フ

乃チ軍艦癸亥丸ヲ奪ヒ馬關ノ戍兵ヲ逐テ其器械資糧ヲ取メ
海陸萩城ヲ攻ム城兵三千人城外ニ出テ、之ヲ拒ク君百卒ヲ
提テ夜大風雨ニ乘シ襲テ之ヲ破ル其將粟谷隼人ヲ斬リ其頭
ヲ槍上ニ掲ケ長驅シテ入ル海軍鼓譟之ニ應ス城兵潰散ス侯
父子方サニ寺院中ニ屏居ス取テ之ヲ奉シ討姦ノ檄文ヲ國中
ニ頒チ不服ナルモノヲ擊テ盡ク之ヲ平ク遂ニ岩國ヲ攻メン
トス和解アリ乃チ止ム兵ヲ用ユルヲ十六日十一戰ニシ長防
二州ノ兵權盡ク其掌握ニ歸ス大臣抗敵スル者十四人ヲ幽シ
謂テ曰ク公等且ク吾カ爲ル所ロヲ觀ヨト終ニ一人ヲ殺サス
衆其度量ニ服ス實ニ乙丑ノ年正月ナリ是年幕兵再舉四疆來

逼ル而シテ長ノ使者宍戸備後介桂小五郎等ヲ廣島ニ執フ君
幕ノ數罪ヲ聲言シ士民ヲ激動ス是ニ於テ長防ノ二國皆憤起
拒守ス兵ヲ四疆ニ出シ幕兵ヲ掃蕩シ直ニ石州濱田及ビ豊前
小倉ヲ陷シイリ又進テ藝州地ニ據リ拒戰數旬竟ニ屈セス其
方略多ク君ニ出ツト云フ大里ノ役ニ君馬關ニ在リ烏帽大紋
胡床ニ踞シ衆ヲ指揮ス威風凜然儼トメ諸侯ノ如シ又長府侯
ヲ奉シテ肥兵ト足立山ノ下ニ戰フ君浴衣ニメ名護屋扇ヲ動
カシ笑テ曰ク鼠輩ヲ破ル是ニテ足レリト豪邁ノ氣其一端ヲ
見ルベシ丁卯ノ年歿ス君ノ病褥ニ在ルヤ公曰ニ其病ヲ問ヒ
人其命ヲ神ニ請フモノ甚タ多シト云フ嗚呼維新ノ業ハ薩長

等ノ數藩ニ成ル而シテ長ノ業ハ君ノ手ニ成ルモノ多シ悲ヒ
哉天年ヲ假シテ今日ノ聖世ヲ目セシメサルハ如何ソヤ
因ニ曰ク此時長松幹君ハ國論ト合セザルヲ以テ山口ニ屏
居シ時機ヲ待タレシガ高杉氏ノ兵ヲ舉クルヤ蹶然起テ之
レニ應シ有志輩ヲ鼓動シ廩舍倉庫ニ據テ大ニ之レカ聲援
ヲ爲スト云フ君ハ現今修史局ニ奉職ス事蹟亦多シ他日應
サニ登錄スベシ

○武井柯亭翁ノ事蹟 附木村蕉雨ノ事蹟

武井柯亭翁名ハ泰字ハ子通柯亭五峯并ニ其別號ナリ岩代若
松ノ人幼ニシテ警悟讀書ヲ喜ミ詩書ヲ善クシ琴ヲ浦上秋琴

ニ學ンテ其蘊奧ヲ究ム翁本ノ名ハ完平家世々舊會津藩ニ膺
仕ス文久中京師ニ在リテ交ヲ諸名家ニ締ブ長門ノ周布氏ト
結交シ密カニ時事ヲ策ル或人ノ爲メニ阻セラレ各其志ヲ得
ズシテ止ム翁朱顏白髮鬚髯殊ニ美ナリ常ニ鶴裳衣ヲ被テ徇
徻散歩シ佳山名水ニ逢ヘバ巖石ニ踞シテ彈琴吹蕭日ノ長キ
ヲ忘ル見ル者其姿貌ノ偉ナルニ駭キ以テ南京人ナリトシ或
ハ嘲笑シテ千日行者ト目スル者アルモ翁ハ夷然トシテ愧色
ナシ權門大家ノ招キト雖モ意ニ適セザレハ辭シテ至ラズ歸
國ノ日途ヲ伊勢ニ取リ秋蘭女史ヲ訪ヒ高山ノ秘曲ヲ受ク維
新ノ後若松鳥居坊ニト居シ尋テ東山湯本村ニ移ル亦烟霞ノ

癖ヲ遂グルナリ是ヨリ益々情ヲ詩酒ニ寄セ巖居川觀老ノ至
ルヲ知ラズ人其書ヲ乞フ者多シ翁曰ク醉サレバ能クセズト
客至レハ常ニ醉ハシメザレバ還サズ陳遵投轄ノ態アリ翁ノ
人トナリ宋ノ方山子我西行法師ニ髣髴タリ若シ東坡居士ヲ
シテ今ニ在テ翁ト逢着セシメバ則チ自ラ其精幹眉目ノ間ニ
顯ハル、ヲ見ルヘシ又源右府アリテ翁ヲ召シ韜略ヲ談セシ
メバ復タ能ク其頤ヲ解クニ足テ而テ賜物ノ銀猫ハ亦童穉ヲ
喜ハシメンノミ或ハ曰ク假令今世ニ源右府アルモ翁ハ山ニ
入ルノ深キ唯之ニ汚サレンコトヲ恐ルベシ豈ニ甘ンジテ入幕
ノ賓タラシヤ翁ノ子某岩代國幣高田伊佐瀨美社ノ稱宜タリ

木村中羽熊之進ト稱シ蕉雨ト號ス亦舊會藩ノ士ニシテ柯亭ノ友ナリ天性伶俐喜ンデ人ノ難ニ赴キ紛ヲ排ス常ニ其窾ニ中ラザルナク猶良醫ノ病症ヲ審察シ良劑ヲ投ズルカ如シ少キヨリ書ヲ讀ミ詩ヲ善クシ最五律ニ長ズ安積良齋嘗テ蕉雨ノ詩ヲ稱シテ王荊公ノ流亞トス其執拗亦荊公ニ似タリ常ニ財理ヲ講シ經濟ヲ談ズ文人ヲ見レバ文事ヲ話シ吏人ヲ見レバ吏事ヲ話シ各人ヲシテ警悟セシム然レモ時アリテ人ヲ騙弄スルヲ以テ或ハ目シテ狡猾トシ遂ニ軼軻シテ要職ニ昇ル能ハス柯亭ノ曰蕉雨ハ人傑ナリ然ルニ時人其才ヲ忌ンデ用ル能ハズ故ニ滿腹ノ經綸世ニ施シ難ク無事寂寞ヲ苦ミ隋珠ヲ以テ雀ヲ彈キ其伎倆ヲ小試スルナリト明治戊辰ノ春蕉雨其友某ヲ訪フ某一軸ヲ壁上ニ掲ケ尤物ヲ得ルヲ喜フ蕉雨勃然トシテ曰ク吾レ常ニ子ヲ以テ緩急事ヲ議スベキ者トス今乃チ吾識鑒ヲ誤ルヲ悔ユ今日豈ニ書畫ヲ品評スルノ時ナランヤト袂ヲ攘ケテ去ル或人當時ノ藩老ヲ蕉雨ニ問フテ曰ク某ハ如何曰ク不可ナリ某々ハ如何曰ク皆不可ナリ然ラハ則チ誰カ今日ノ急ニ當ルベキ蕉雨笑テ曰ク吾レ自ラ當ランノミ遂ニ建議スル所アリ其言果シテ行ハレズ蕉雨事ノ成ラザルヲ知り若松城ヲ望ンテ曰ク惜ヒカナ天主閣將サニ一片ノ煙タラントス

ク無事寂寞ヲ苦ミ隋珠ヲ以テ雀ヲ彈キ其伎倆ヲ小試スルナリト明治戊辰ノ春蕉雨其友某ヲ訪フ某一軸ヲ壁上ニ掲ケ尤物ヲ得ルヲ喜フ蕉雨勃然トシテ曰ク吾レ常ニ子ヲ以テ緩急事ヲ議スベキ者トス今乃チ吾識鑒ヲ誤ルヲ悔ユ今日豈ニ書畫ヲ品評スルノ時ナランヤト袂ヲ攘ケテ去ル或人當時ノ藩老ヲ蕉雨ニ問フテ曰ク某ハ如何曰ク不可ナリ某々ハ如何曰ク皆不可ナリ然ラハ則チ誰カ今日ノ急ニ當ルベキ蕉雨笑テ曰ク吾レ自ラ當ランノミ遂ニ建議スル所アリ其言果シテ行ハレズ蕉雨事ノ成ラザルヲ知り若松城ヲ望ンテ曰ク惜ヒカナ天主閣將サニ一片ノ煙タラントス

ト是歲六月朔白川ノ敗ニ戦死ス時年四十餘或ハ曰ク一農
家ニ入テ屠腹スト

○池野藤兵衛の奇話

岩手縣下盛岡新穀町の雜貨商木津屋ハ世々池野藤兵衛と稱
シ豪商カリ藤兵衛人トカリ清廉ヨシテ施と好み常ニ傘數十
本と用意し途中遽ニ雨ニ遇ふ者あれハ知ると知らざるとを
問はずこれを貸し與へ其難を救ひしとぞ是れ等の美舉甚だ
多く其店繁榮昔ニ減ぜずと云ふ祖父藤兵衛また慈仁の人ニ
して施と好み屢々金穀と捨て、貧民を救ふ其功業の最著し
きもの備荒倉あり俗ニ市中溜穀と稱するものニして其法稍

や常平倉ノ類し遺制今猶存せり舊幕の時南部侯其功を賞し
て苗字帯刀を許し并ニ市租を免されたりとぞ此人ノ一の面
白き話あり今と距る二十年前或夜盜賊あり家財を盗み逃げ
去らんとして誤て塀の上ニある鏡の忍返ニ陰囊を貫き死し
居たり翌日藩吏の檢視を受け夫れノ事濟みし後ち主人直ニ
家人ニ向ひ其忍返を取拂ひ再び設くることなからしむ家人
等互ニ私語して其意をあやしむ主人曰く余が忍返を設くる
ハ全く賊を拒く爲めにして決して殺す爲めニあらざりしと
此賊計らずも非命の死をいたせしハ實ニ傷ましき事ならず
や我カ家財ハ寧ろ半バ盗み去らるゝとん再ハ如此き慘然の

ことと見ると忍びずとて遂に其忍返を取拂ハせしとぞ嗚呼
慈仁の志深き如此し此家の安富尊榮なるも亦偶然ならざる
と知るべし

第二十號謬誤追正

三葉第九行

〔ソテ初〕ハ〔初メテ〕ノ誤

四葉第五行

〔仕舜〕ハ〔仕舞〕ノ誤

六葉第九行

〔ととろ〕ハ〔ととろ〕ノ誤

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一
割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸
事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人

長尾景弼

編輯人

杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

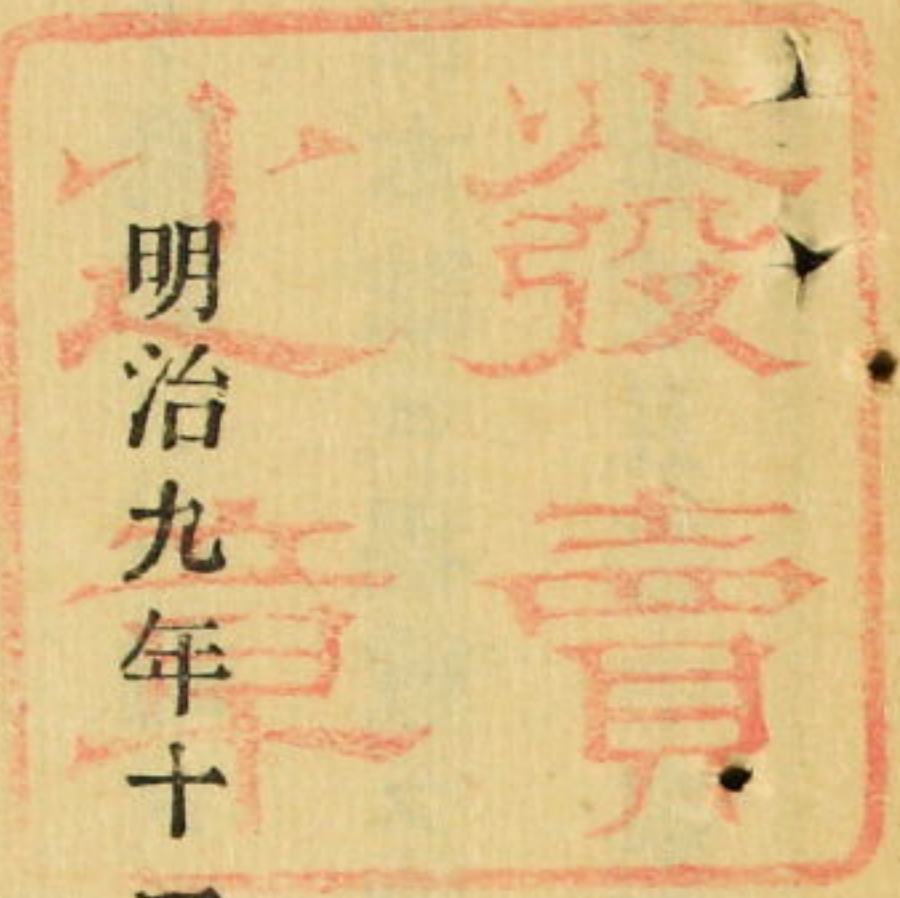
博聞社

本局

加賀國金澤町

益知館

所	捌	賣
西京古門前三吉町		博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南入		全分社
千葉縣下寒川		全分社
埼玉縣下浦和驛		全分社
東京常盤橋前		全支店
加賀國金澤上堤町	中村喜平	
同 安江町	近田太平	
同 堤町	野島信吉	

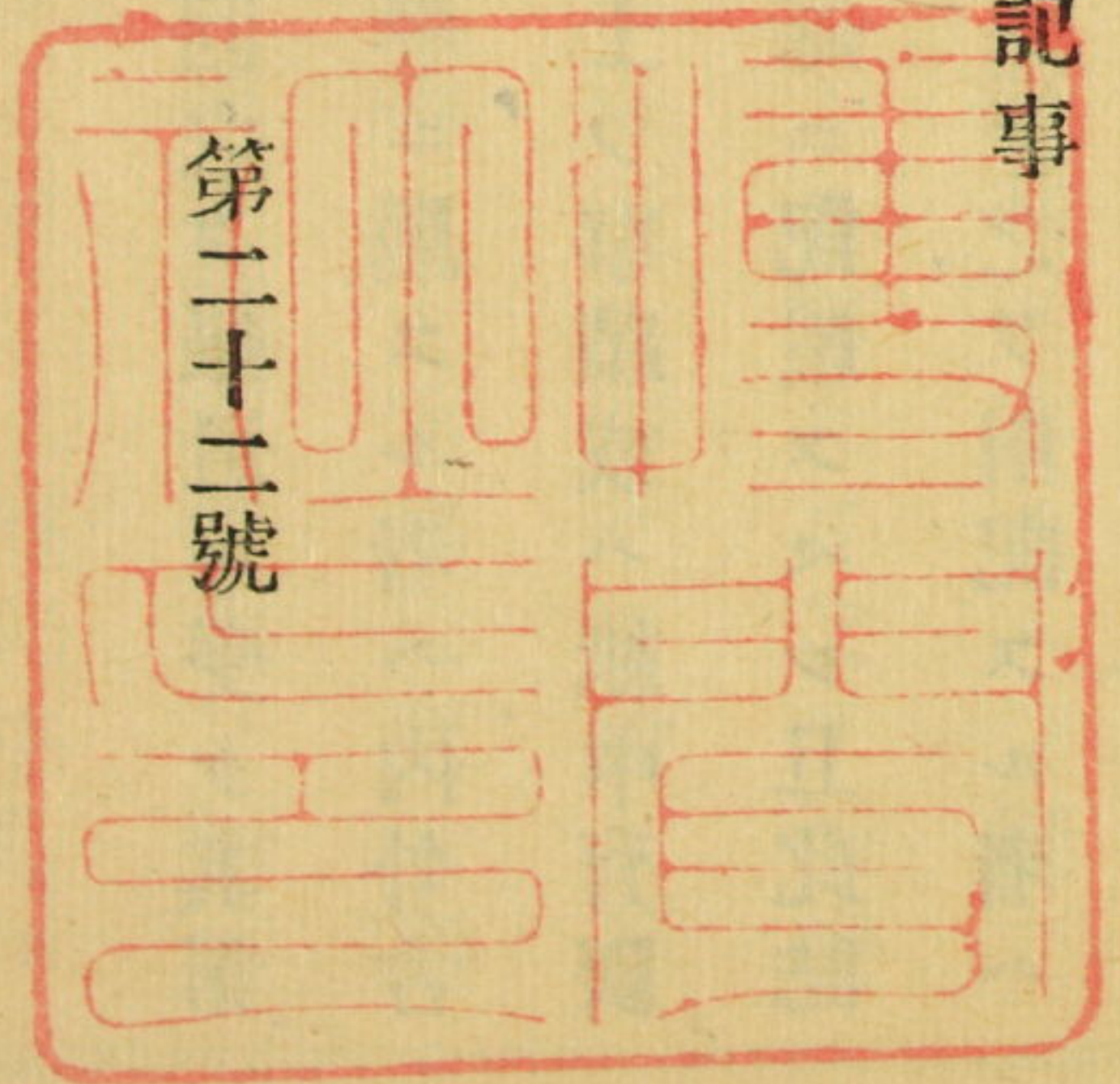


明治九年十二月廿八日

鷺津毅堂君小傳ノ續キ

旭玉山雕刻ニ奇巧ヲ得ルノ記事

名譽新誌



第二十二號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第
廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古
今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限
ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌
ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ
希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ
識リ勸懲ノ一端タランヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニ報告ヲ賜
ハ幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十二號

○鷺津毅堂君小傳ノ續キ

鹽谷宥陰一夜忙シク藤森弘庵先生ノ門ヲ敲キ竊カニ告テ曰
ク松浦某水府老侯ノ爲ニ京師ニ上リ錦旗ヲ乞フ鷺津氏モ亦
之レニ與ル而シテ氏ハ常ニ先生ノ門ニ來往ス亦タ人ノ疑フ
所トナル恐ラクハ禍殃先生ニ波及セントス如カズ之ヲ謝絶
センニハ先生心驚キ而テ佯テ知ラザルモノ、如クス徐ニ答
ヘテ云ク錦旗ヲ乞フハ重事ナリ蓋シ訛傳ノミ鷺津氏豈ニ斯
ノ舉動アラシヤ兄請フ放念セヨト謂テ酒茶談笑平生ノ如シ
鹽谷氏亦タ能ク意會シテ歸リ去ル去レハ則チ弘庵先生急ニ

鷺津君ヲ招テ到ル先生告グルニ鹽谷氏ノ話ヲ以テス語畧ニ
シテ意詳ナリ

或ヒト曰ク時ニ老藤俊鷺對坐凝然言語セサルモノ半晌時
間東台鐘響テ三更燈華墮ツ異哉大丈夫前途ハ不言ノ中ニ
定マル

錦旗ヲ乞フ事固ヨリ訛傳ニ屬スト雖由テ來ルアリ當時鮫
島某アリ攘夷論ヲ持ス水府老侯ヲ副將軍ト爲シ錦旗ヲ授ケ
ンコトヲ朝ニ請ハント欲ス松浦某之ヲ止メ星巖モ亦タ之ヲ
止ム事終ニ寢ム廟議別勅ヲ裁シ將軍ニ賜フノ議決シタリト
云フ

鮫島正介ハ薩人ナリ軍學ニ精シク泰西ノ兵制ニ通ズ藩ニ在
テ戎隊教導タリ只慷慨ノ士タルノミナラズ亦タ才略アリ曾
テ温恭公ノ夫人ヲ薩ヨリ納ルノ日正介善ク事ヲ周旋ス不
幸ニシテ夙ク歿シ維新ノ盛時ニ遇ハス噫

六年冬鷺津君久留里侯ノ聘ニ應シ俸若干ヲ受ク後ニ藩政ヲ
論シ候ニ上書シテ報セズ適々疽背ニ發ス故ヲ以テ俸ヲ辭ス
候賓師ヲ以テ遇シ月次贈餼アリ小島侯龜山侯モ亦タ賓禮ヲ
執テ君ヲ請シ經ヲ講セシム諸家ノ贈餼スルコト頗ル多ク聲
名日ニ高シ君歎シテ曰ク郷ヲ離レテ歲月遙ナリ母氏倚門ノ
望ヲ奈何セン吾ン歸省スベシト君ノ嫡生母儀貝氏賢ニシテ

烈操アリ初メ君ノ將サニ游方セントスルトキ母氏戒メテ曰ク家門中コロ圯レ先大人疾ク歿ス汝今ヨリ志ヲ堅クシ良師ヲ求メ黽俛學ヲ脩メ以テ家聲ヲ起スベシ若シ言ヲ立テ事ヲ立ツルコト能ハズ我カ望ヲ空フスル時ハ則チ吾ハ汝ヲ視テ子トナサズ又タ起テ親カラ紅白ノ帛ヲ剪テ之ヲ襟内ニ繫ケテ云ク汝之ヲ識ルセ君再拜シ唯々シテ遂ニ別ル此ニ到テ歸省ス母氏大ニ喜フ

慶應元年尾州慶勝公君ヲ聘ス是ヨリ先キニ君カ家居スルヤ諸侯厚祿ヲ以テ君ヲ聘ス君皆ナ之ヲ辭ス尾州公ノ聘到ルヤ君決然起テ曰ク家居日久シ行藏ハ時ヲ曠シクス可カラズ况

ヤ公ハ賢明ニシテ士ヲ好ム吾レ宜ク就クヘシ入テ見レハ則チ祿百五十苞ヲ賜ヒ侍讀トナリ尋テ留書頭ニ補セラレ侍讀ハ故ノ如シ又祿五十苞ヲ増ス君新進ヲ以テ要路ニ當ル人或ハ喜ハザルモノアリ君以テ意ニ介セズ幾モナク教授班側物頭ニ遷リ督學ヲ攝ス三年ニシテ督學ニ專任シ大ニ學政ヲ董シ釐ム尾張ノ學風タル郷人家田大峯ノ説ヲ奉シ固陋頗ル甚シ君ノ督學ニ任ズルヤ舊習ヲ一洗シ兼テ國典ヲ讀マシム國人斯道ノ倚ル所ヲ得テ衆競テ學ニ就キ學風宏ニ興ル德川將軍ノ大政ヲ還上スルニ當リ朝廷詔シテ尾州公ヲ召ス公ノ京ニ上ルヤ君亦タ從行ス會々君ノ母氏病アリ報到ル馳

セテ歸寧ス母氏既ニ歿シタリ公京ニ在テ君ヲ召ス復タ急ナ
リ君喪中ヨリ起テ京ニ赴ク是時朝廷攝家門流ヲ廢シ新タニ
議定參與ノ職ヲ置ク尾州慶勝公議定タリ徳川内府會桑ヲ率
井テ大坂ニ退ク朝議云ク今大政新タニ王室ニ歸シ財用立ト
コロニ供セズ其レ之ヲ列藩ニ課セザルベカラズ而テ徳川氏
ノ封疆最大ナリ課財ノ事亦タ彼ヲ首唱ト爲サシメテ可ナリ
トス事聞ス特ニ尾州公越前侯ニ詔シテ往テ内府ニ諭サシム
公中途ニシテ病暴カニ作ル又タ諭ヲ傳フルコト能ハズ乃チ
越前侯及ビ尾州ノ國老成瀬隼人正朝旨ヲ傳フ君及ヒ田中不
二磨之レニ從フ徳川内府謹テ詔ヲ奉ス時ニ幕下ノ兵伏水ニ

次ルモノ千ヲ以テ數フ皆疎暴ニシテ大體ニ暗ク動モスレハ
暴舉ヲ計ラントス勢ヒ堤防ス可カラズ君及ヒ田中氏ト幕臣
塚原但馬永井玄蕃ニ説テ曰ク内府公既ニ恭順ナリ麾下ノ士
宜シク戒慎スベシ而テ伏水ノ兵ヲ退クルヲ急務トス若シ一
旦事ヲ誤ルトキハ驪モ及バザルナリト反復論辨諭スニ順逆
ヲ以テス二氏其説ニ服シ周旋スルト雖モ遂ニ兵ヲ徹スルコ
ト能ハス初メ朝廷尾州公ヲ派遣スルニ七日以内ニ往復スル
コトヲ約ス故ニ公疾ヲカメテ京ニ歸リ成瀬隼人正ヲシテ代
テ復命セシム實ニ明治元年一月一日ナリ其三日果シテ伏水
ノ變起ル公疾ヲ輿シテ參朝シ藩兵ヲ以テ陽明門ヲ護衛セン

ユトヲ乞フ准許ス此日官軍力闘シ幕兵大ニ敗レ内府ヲ擁シ
テ海路東ニ走ル

皇上震怒シ慶喜ノ官爵ヲ剝グ官軍東海東山二道ヲ下リ行々
賊黨ヲ降シ東國ニ入ル公ハ請テ國ニ就キ奸臣ノ賊ト聲息ヲ
通スルモノヲ誅鋤シ藩政大ニ治マル公君ヲ廣敷用人ニ舉ケ
小納戸頭取ヲ兼テシメ祿百苞ヲ増ス公又詔ヲ奉シテ隣藩ニ
諭シ勤王ノ效ヲ奏セシム君丹羽大受ト其事ヲ管掌ス四月流
賊甲信ノ境ニ侵入ス尾州兵ヲ出シテ之ヲ伐ツ公自ラ親軍ヲ
以テ後繼タリ甲信ノ賊掃清シ總軍凱旋ス此行君復々軍ニ在
テ機務ニ參ス百事立トコロニ辨シ軍肅トシテ整フ朝廷維新

ノ功勳ヲ論シ公ニ一万五千石ヲ賞賜ス公亦タ君ノ功ヲ賞シ
世祿二百五十石ヲ給ス其年八月朝廷君ヲ徵ス病ヲ以テ辭ス
允サス遂ニ起テ權辨事ニ拜ス二年三月聖駕東向ス君陪從シ
テ東京ニ駐マル七月大學少丞ニ轉シ秋月從四位仙石從五位
松岡時敏等ト和漢洋三學ヲ合スルノ事ヲ掌トル八月出テ登
米縣權知事ニ遷リ任ニ赴ク管下二十四万四千石餘アリ時ニ
天淫霖連日涼飈驟カニ到ル穀登ラス管内舊積空シ君百方經
營シテ百姓ヲ餓餒ノ中ヨリ救ヒ終ニ其生命ヲ保全セシト云
フ

編者曰ク此ノ年陸羽ノ凶荒最モ甚シトス余明治五年ノ秋

陸中ニ行ク途上白河ヲ過ギ八幡祠前ノ茶店ニ憩フ店上包餅ヲ賣ル粗粢ヲ煉テ赤小豆ヲ囊ミ鐵板上ニ載セテ焙焙スルモノ餓死餅ト呼フ余試ニ取テ一嚙ス復タ嚙ス可カラス顧ミテ茶店ノ老翁ニ問フ餅ノ名甚タ奇ナリ抑モ由アルカ老翁涙ヲ忍ンテ曰乞フ古皂樹下ノ短碣ヲ看ヨ這是レ餓死ノ供養塔村農相ヒ集テ營ム者ナリ戊辰ノ年北藩事アリ本土其要衝ニ當ル小民亦タ丁役ニ課セラレ初ハ則チ守兵ノ爲メニ疲レ後ハ則チ官兵ノ爲メニ勞ス晝夜間斷ナシ田ニ水アリ野ニ草アリト雖モ稻苗ヲ插ムノ餘暇ナク偶々月ヲ載テ植ヘタル者モ春晚初夏ノ際陰霖ノ爲ニ生苗ヲ腐敗サ

レ遂ニ一粒ノ米ヲ得ス蕨根乾テ椽子盡キ布囊空シフメ復タ錢ナシ殆ンド溝壑ノ鬼トナラントス此餅タルヤ素ヨリ甘カラズト雖モ賤儂カ肝ヲ絞テ丸メタルモノ一拳ノ大其價纔ニ三十文ナリ之ヲ得ル者ハ生き得ザルモノハ便チ斃ル餅素ト名ナシ里人ノ呼テ餓死餅ト爲ス喰テ餓死ヲ免カル、ノ謂ヒ乎喰ハズシテ餓死ニ到ルノ謂ヒ乎其ノ所以ヲ知ラザルナリ今ニ暨ンテ賣ルコトヲ較メズ聊カ以テ警戒ト爲ス是モ亦タ賤儂カ微意ナリト悄悄々愀色アリ余聞テ悵然淚垂ル嗚呼當時凶荒ノ慘毒ナル斯ノ如シ而シテ君恤救ノ辛苦又以テ見ルベシ

○旭玉山雕刻の奇功を得るの記事

横須賀に住する一洋人あり博物學士かりしが或日和客某來て匣中より一の髑髏を出し之を示しければ洋人謂く是れ獸なりと乃ち起て書嚙に入り良久くして坐す還り客と謂て曰く此髑髏を相するは猿と似て猿は非ず猿より賢きものなるべし然れども余未此の如きの獸を見ず諸書を開するも亦此の獸を載せず獸中の奇なる者にして人間と伍す可し料らず日本は此の獸あるとハ請ふ獸の名を聞かん且又之を生擧し或之を酌漬して其全體を得ば吾れ汝に報ゆるは巨多の財を以てせん汝も爲め之を圖れ和客云く是れ人なり決して獸に非ず洋人色を作して曰く髑髏大を凡そ二寸なり世界豈此の如き短小の人あらんや汝愚自から其愚を計らず還て人を愚弄せんとするか客失笑して曰く是れ雕刻する所は係る形の大小ハ其手に隨てなる亦何ぞ怪まん洋人初めハ信ぜずして尙眞物なりとし之を摩弄することと稍や久しく之を仰よし之を俯よし或ハ正面よし或ハ側面よし暗處に置き明處に放ち遂に捧げて日光に照し纔か象牙理紋の燦然映透し來るを見出し大に驚て曰く是れ人にして非ず神なり神の人加ふる者なり凡歐米諸洲工人の物を作り精巧の眞を奪はんと欲して未だ其眞を得るもの甚だ稀なり况や此髑髏の如きハ

て獸に非ず洋人色を作して曰く髑髏大を凡そ二寸なり世界豈此の如き短小の人あらんや汝愚自から其愚を計らず還て人を愚弄せんとするか客失笑して曰く是れ雕刻する所は係る形の大小ハ其手に隨てなる亦何ぞ怪まん洋人初めハ信ぜずして尙眞物なりとし之を摩弄することと稍や久しく之を仰よし之を俯よし或ハ正面よし或ハ側面よし暗處に置き明處に放ち遂に捧げて日光に照し纔か象牙理紋の燦然映透し來るを見出し大に驚て曰く是れ人にして非ず神なり神の人加ふる者なり凡歐米諸洲工人の物を作り精巧の眞を奪はんと欲して未だ其眞を得るもの甚だ稀なり况や此髑髏の如きハ

人身窮理の蘊奥を得る者非我よりハ何ぞよく此の作あらんや故ニ神の人ニ加ふるものなりと謂ふ所以ニして歐米工人の遠く及ハざる所以なり便ち髑髏を奪つて鏡函ニ藏シ金若干を出して曰く髑髏吾れ之を買ひ了れり請ふ價を取めよ客其價の多きを訝かる洋人曰く汝亦學問なし未ち工人の劬勞を知らざる者なり客其價を納め去り之を工人ニ附する工人果して充分とせずとぞ嗚呼洋人眼あり和客識ふし髑髏を作るもの旭玉山とす玉山ハ初め苦學せし人なり壯年ニ及んで雕刻を好む人物鳥獸山水皆其真物ニ對して法を取る故ニ師をくして自から其妙を得る曾て無缺の一髑髏を得

たり輒ち擬して雕刻し自から謂らく真然なりと持して松本良順先生ニ示す先生曰く形ハ似たり未ち其真を得ず因て所藏の一髑髏を出し筋骨關節より形體功用まで一々之を指し示され汝平生百物真を求むるに勤む余其篤志を愛す故ニ示すと謂ふ玉山拜謝して去る是より形體の學を研究し髑髏の雕刻殆んど其真ニ至りしと云ふ
林東先生曾て洋行の時玉山雕る所の小髑髏を杖頭ニ飾り携へて彼ニ到る厚く交る所の一洋人あり一日其杖を先生ニ請ふ許さず強て請ふ固く許さず遂に杖を奪つて其髑髏を斫り去て還さず之を愛藏して人の一觀を乞ふも惜んで示さずと

どまた五六年前蘭醫某氏玉山よ乞ひ髑髏二顆と雕らしめ一
ハ其國の醫院よ置き一ハ獨逸の博物館に藏むと云ふ

○親鸞聖人傳並東西本願寺系傳

本願寺宗祖親鸞聖人ノ事蹟及ヒ東西本願寺系傳ヲ纂輯シ附
スルニ親鸞及ヒ蓮如ノ肖像ヲ以テシ且ツ今般親鸞へ見真大
師ト追謚セラレシ事マテ詳細記載シテ洩サズ以テ名譽新誌
別集トナシ別ニ一卷ヲ刊行セリ

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一
割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便稅ヲ受ク但諸
事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼

編輯人 杉村雄二

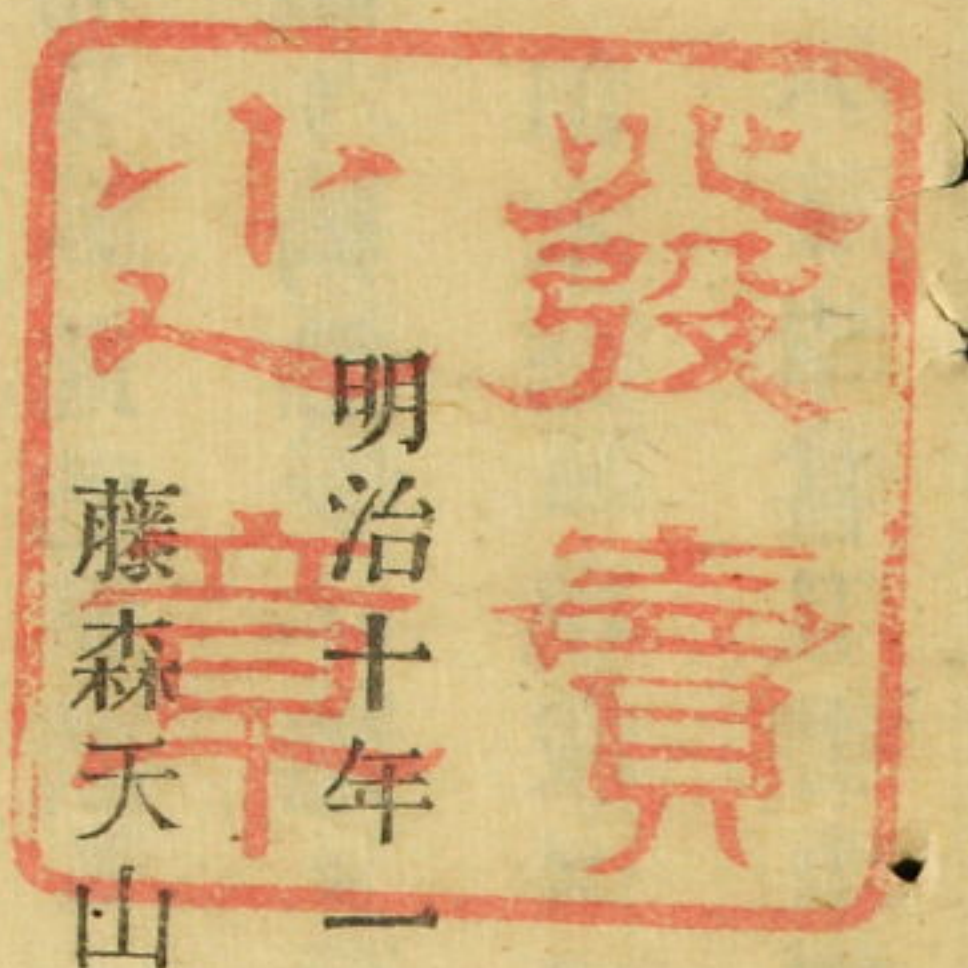
東京愛宕下町三丁目

博聞社

加賀國金澤町

益知館

所	捌	賣
同	同	同
堤町	安江町	野島信吉
加賀國金澤上堤町	中村喜平	野島信吉
東京常盤橋前	全支店	野島信吉
埼玉縣下浦和驛	全分社	野島信吉
千葉縣下寒川	全分社	野島信吉
大坂心齋橋通南 久太郎町南入	全分社	野島信吉
西京古門前三吉町	博聞分社	野島信吉



明治十年一月九日

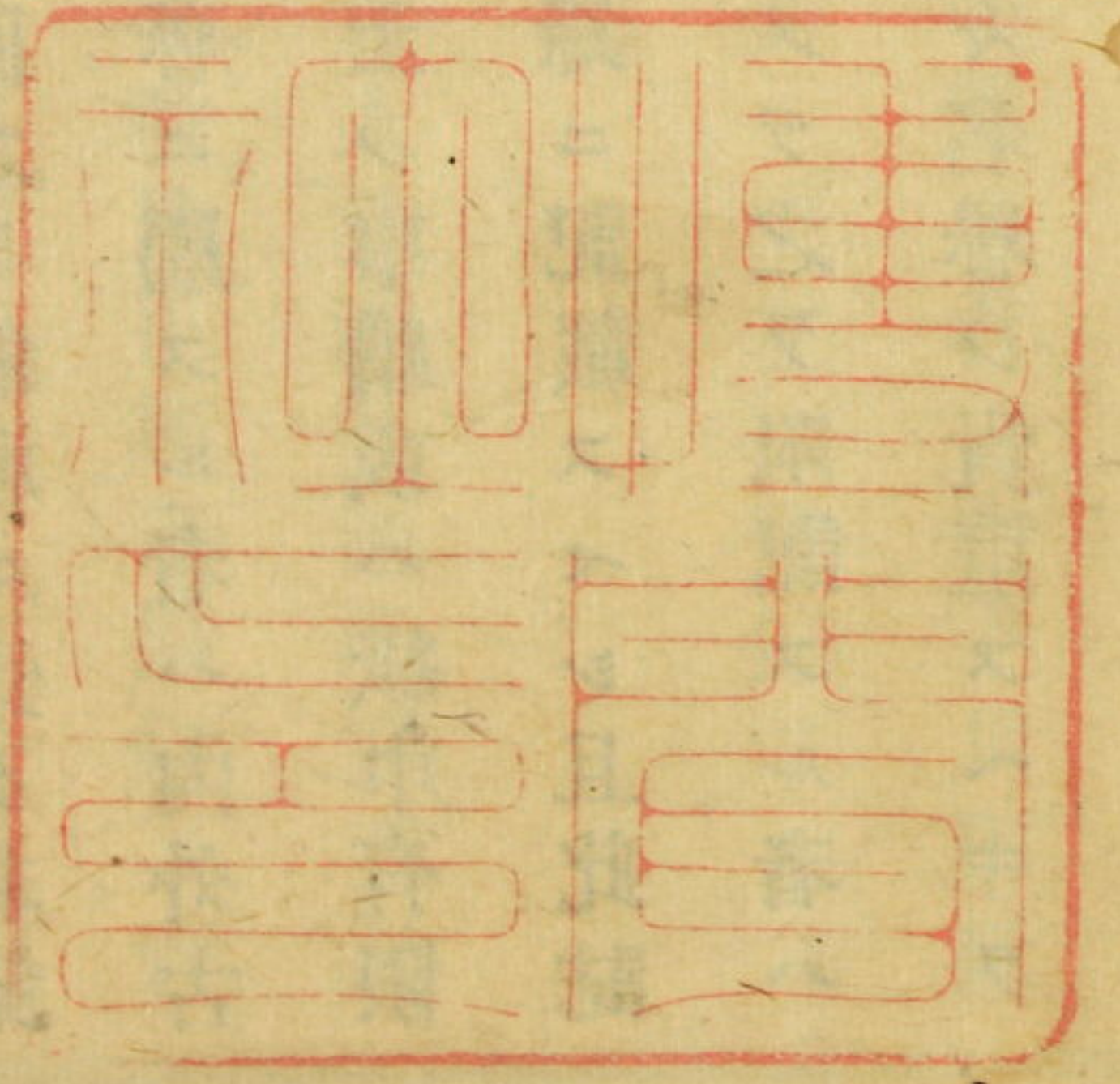
藤森天山ノ傳

安岡良亮君最後ノ美言

下總國同協社開墾ノ記事

横山松三郎ノ記事

河野源八ノ美談



名譽新誌

第二十三號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第
廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古
今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限
ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌
ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ
希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ
識リ勸懲ノ一端タラシヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニ報告ヲ賜
ハミ幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十三號

○藤森天山ノ傳

君大儒碩德有爲ノ資ヲ以テ德川氏積弊ノ時ニ遭逢シ竟ニ其
志ヲ遂クル能ハズシテ歿ス吁亦惜ヒ哉偶マ君ノ門下川田氏
所撰ノ碑文ヲ得タリ仍テ其文ヲ傳ニ易ヘテ左ニ登録ス

○天山藤森先生墓表

安政戊午朋黨獄興自公卿大夫以迄士庶人株連蔓延獲罪者數
十百人而吾天山先生與焉當此時權臣專政忌正議者寇讎不啻
以先生一代名儒言論文章足鼓動人心故爲其所惡特甚酷吏承
風鍛鍊羅織欲處以嚴刑而事無絲毫實乃指摘言語爲誹謗政事

以逐之居數年權臣斃時勢一變先生特赦歸臥病於家人皆謂近
用有日而遂不起哀夫先生諱大雅字淳風姓藤森氏通稱恭助號
弘庵晚更天山江戶人曾祖諱良整祖諱良武並仕酒井侯至父諱
義正有故辭祿更仕一柳侯曾祖母帆坂氏祖母橫田氏母堀越氏
先生天資聰敏好學矯々崇尚風節雖在下位不忘天下之憂嘗曰
士不幸不得志當時則宜立言傳不朽若夫一身存歿莫足輕重於
世非豪傑也甫弱冠承父後任右筆旋兼世子侍讀世子嗣立直諫
忤權貴致仕去會年穀不登物價騰揚先生孳累數口家無擔石儲
而傭書舌耕講讀不懈意晏如也天保甲午土浦侯聘以賓禮參知
國政興文教革吏弊化民風用事十餘年而俗土不喜流言沸起乃

謝疾去侯思其舊勞給三口米弘化丁未下帷江戶弟子益進侯伯
執贄問道諸藩執政往々有就詢國事者嘉永癸丑墨夷遣軍艦來
乞互市有司危懼頗爲其所凌壓先生憤激著海防備論二卷以明
禦海之術旣而水府烈公有旨建白時務先生著芻言六卷上之議
論明快切當時病公嘉納焉先是列國聞先生名而聘之者以十數
并以老病辭至此公厚禮招之亦辭而不就人間其故曰吾不忍負
舊君公聞而益賢之乃歲給米若干苞而不在仕籍有所疑則使人
就問焉蓋異數云以寬政己未三月十一日生以文久壬戌十月八
日歿享年六十有四是月十三日葬於淺布曹溪寺先塋之次門人
私謚曰文雅先生先生博覽多通於書無所不讀尤工辭章我邦偃

武以降人材輩出儒教彬彬獨文章之道未開加有葭園之徒推尙
李王餘毒被天下久矣及三博士出矯而正之學者皆知韓柳歐蘇
之可宗與所謂篇法章法之不可無而碧海柴氏豐山長野氏實承
其傳先生師事豐山氏周旋於碧海洞庵穀堂諸賢間益講求而加
精焉以故其文典麗雅健而結構布置波瀾擒縱悉中程度深得唐
宋大家之旨詩亦驅役百氏供我使令尤長於五言古風又善筆札
楷法參酌歐褚行草脫胎米南宮祝枝山別出一機軸晚謔居行德
聲價益重四方之士乞銘乞序乞揮毫乞添刪詩文者爭趨其門先
生坦懷待之言笑啞々終日不倦人服其雅量然中心有確乎不可
拔之節先是先生下獄物議洶々危在不測先生泰然不懼曰吾得

與范滂偕遊於地下吾願足矣且夫死生有命吾將安命以待天定
之日曾幾何時則黨禁解弛先生赦歸而向之用事者削封禪秩貶
黜幾盡豈非所謂天定者耶嗚呼先生一身去留關乎世運隆替之
故則其跡宜錄於太史氏况文章傳世不朽者在焉尙何待剛輩表
章但世之稱先生者或訛傳失實故剛不辭不文揚書其行事於墓
上之石蓋從遺命也先生始娶池田氏繼娶三坂氏生三男一女長
曰遜次曰連次曰健早夭女適前園氏所著有如不及齋文集春雨
樓詩集如不及齋叢書牧民事宜江湖記勝及雜著凡若干卷

門人

松山藩督學川田剛謹撰

○安岡良亮君最後ノ美言

君熊本兇徒ノ爲メニ傷ツケラレ其翌日將サニ死セントス人ニ語テ曰ク今日事此ニ到ルハ皆吾カ過ナリ吾レ曾テ士族輩ノ頑陋無氣力ナル尙婦女子ノ如クニシテ其振ハサルヲ憾ム因テ其精神ヲ發揮セント欲シ事ヲ以テ之ヲ激スルモノ又多シ圖ラザリキ此ノ舉動ヲ爲スノ氣概アラントハ此レ望外ノ幸ヒニシテ吾カ見ノ大ヒニ誤ル所ナリ吾身死スモ聊カ怨ミトセズ却テ此元氣アルヲ喜フ吾レ死スルノ後此ノ地ニ令タル人其情ヲ察シ此ノ氣ヲ培養シ撫御其宜ヲ得バ他日國家ノ大用タル此ノ士族ニ待ツアラシム是レ余カ切ニ希望スル所ナリト言畢テ乃チ瞑セラレタリ嗚呼君ノ已ヲ罪シテ人ヲ咎メズ

身ノ死スルヲ悲マズノ國ノ元氣アルヲ喜フ公平無我愛國ノ誠衷自カラ言外ニ見ハル宜ナル哉熊本土民ノ感歎シテ止マザルナリ

○下總國富山同協社開墾ノ記事

下總國富山同協社開墾ノ盛ナル世人ノ能ク知ル所ナリ抑々同國印旛千葉殖生ノ三郡ハ荒漠ノ地多ク所生ノ物産モ少ナカリシカバ佐倉舊藩主堀田見山公之ヲ慨シ有志ノ開墾說ヲ唱フルヲ嘉ミシ文久三年其藩士ノ東京ヨリ佐倉ニ移住スルモノニ與フルニ荒蕪地ヲ以テ其業ヲ試ミラレシニ何レモ憤激勉勵公暇ヲ以テ其業ニ就キ三年ヲ出ズシテ最早數箇ノ

村落ヲ爲セシヲ見テ他ノ人々モ開墾ノ業ハ唯々一ノ精力勉
強ニアル而已ニシテ亦難事ニアラザルヲ知り益々其志ヲ固
クセリ明治四年廢藩置縣ノ際士卒授業ノ爲メ地所拂下ケノ
命アリ是ニ於テ有志感激シテ天恩ノ辱ナキヲ喜ヒ同心協力
結社スルモノ二十餘名之ヲ同協社ト名ケ纔ニ二百金ヲ資本
トシテ此ノ富山ノ地ニ就テ起業セリ此ノ地タルヤ素ヨリ曠
漠荒蕪ノ地ニシテ連互數里一ノ植物アルヲ見ザリシニ人々
聊カ其志ヲ屈セズ成功十年ノ久ヲ期シ居處屋宇ハ雨露ヲ凌
クヲ度トシ數里外ヨリ此ノ場ニ來リ五日毎ニ交番シ米ヲ負
テ自カラ炊キ一人ノカラ十三坪ヲ開墾スルヲ法トシ既ニ開

墾セシ地ニハ先ツ、豚糞ヲ以テ肥糞ニ供シ馬鈴薯(馬鈴薯ニテ
葛酒及ヒ燒酎ヲ製造ス)ヲ植付ケ拮据黽俛大ヒニ其功ヲ奏セ
シカハ入社ヲ請フ者稍ヤ多ク其業益々盛ニシテ結社概則利
益頒布ノ方法ヨリ社中相救法等(死生吉凶並災害アルノ時積
金ヲ貸與シ之ヲ救助スル方法ナリ)ニ至ルマテ是ニ於テ整然
見ルベシ六年堀田侯其功ヲ嘉シ金三百圓ヲ出シ又本年千圓
ヲ出シ社員ノ列ニ加入シ且ツ贈文アリテ大ヒニ之ヲ獎勵セ
ラレシヨリ事業益々進捗シ現今開ク所ノ地既ニ茶園トナ
ル者數十町ニシテ社員四百八十餘名ノ多キニ至ル實ニ盛ナリ
ト云ベシ社中其功ヲ喜ヒ開墾著手ノ日ヲ以テ祭日ト定メ毎

年謝恩祭ヲ設ケ並社員死亡ノ者ヲ招魂祭祀シ及ヒ新ニ茶摘
ノ唱歌ヲ製シ聖世ヲ奉祝ストゾ七年ノ冬勸業寮御雇ノ米人
「アブデヨンス」此ノ同協社ニ來リ大ニ之ヲ賞譽シテ曰ク地
ヲ墾キ物ヲ産シテ利益ノアルコトハ米國カリホルニアニ如ク
ハ無シカリホルニアハ纔ニ二十年以來ノ開ケニテ外國ニ輸
出ノ物産總計八千萬圓ニシテ農工ノ員八萬人アリ輸出高ヲ平
均スルニ一人ニ付千圓宛ナリ日本ハ農工ノ員一千四百八十
〇萬八千四百十六人ニシテ外國ニ輸出ノ總高纔ニ二千萬圓
一人ニ平均スルニ一圓五十錢程ニテ外國ヨリ輸入高ハ二千
九百萬圓ナリ因テ交易ノ損失九百萬圓ナリ年々九百萬圓宛

ノ損失ニテハ疲弊ヲ極ムルニ到ルベシ今度台灣ノ事件ニヨ
リ支那ト談判シ戰ハズシテ彼ニ勝テ償金ヲ出サシムルハ誠
ニ日本ノ美名ヲ萬國ニ輝カセシナリ彼モ亦開化スレバ後來
ノ勝ヲ取ル必ラズ富ヲ以テセザルベカラズ因テ予モ亦日本
人民ノ富有ナランヲ欲シ下毛常陸ヲ經歷スルノ官許ヲ蒙リ
此同協社ニ來リ規則方法等ヲ聞キ並ニ諸君ノ勉精ヲ見テ實
ニ感心セリ同心協力ノ力ハ譬ヘハ一本ノ竹ニテハ力ヲ薄ク
二本合スレハ少シク強ク十本ナレバ倍々強ク百本ニ至レバ
遂ニ折レ難キニ至ルモノニテ即チ日本ノ富ヲ爲シ獨立ヲ保
ツベキ基ヒニシテ是迄日本ヲ經歷セシニ斯ル美事ハ見聞セザ

ルナリ實ニ同協社ハ暗處ニ一點ノ燈火ヲ燈シ砂漠ニ一箇ノ
美花ヲ笑カセシナリ此ヲ以テ全國ニ擴充スルトキハ日本ノ
富ハ期シテ待ツベシ農ハ第一ノ貴キモノニテ高貴ノ官員タ
リモ悉ク雇人ナリ士族ハ舊ノ武士ニテ文武共ニ辨ヘタルコ
ナレバ器械等ノ運用ヲ爲スニ至テハ平民ノ及バザル所口ナ
リ且ツ此地ハイキリスアメリカトルコ等ニテ未タ見ザル沃土
ナリ斯ル沃土ナレハ幾多ノ物産ヲ生シ巨大ノ富ヲ爲スベシ
下毛ノ日光山ニテ墓石ノアリシヲ尋子シニ堀田正盛トテ殉
死ヲ禁止シテ死セシ人ノ墳墓ナルヨシヲ聞ケリ斯ク賢明ノ
名アル堀田家ニ仕ヘラレシ諸君ナレバヨソ斯ル美舉ハアリ

シナルベシ子歸國ノ上必ラズ新聞誌エ顯ハシ賞譽スベキナ
リ此ノ如キ美事ヲ見シ上ハ上總安房等ヲ經歷スルニ及バズ
政府ヲシテ同協社ニ力ヲ添ヘ其業ヲ盛大ニセシメント欲ス
ト云テ歸京セリ後キ勸業寮其功ヲ賞シ耕牛器械等ヲ貸與セ
ラレシトゾ

○横山松三郎ノ記事

或人没シテ後キ三年孝子某遺像ヲ作ラント欲シ先人ノ親知
ニ請フテ圖ヲ草セシム横山松三郎君モ亦其ノ知人ナリ草圖
ヲ看テ謂ク此圖ヤ眼ハ眼ニシテ能ク似タリ鼻ハ鼻ニシテ亦能ク
似タリ其他耳口眉毛頭顱骨相ニ至ルマテ逐一眞ヲ得ザルナ

シ是レ生日久シク親接スルモノ、畫ナルヘシ但惜ムヲクハ
五官ノ位置微ニ属セズ故ニ全面コレ似ザルナリ乃チ自カラ
油繪ノ肖像一幅ヲ作テ之ヲ贈ル其真似ナル恰モ生ケルカ如
シ後チ横山氏其ノ相識ルモノト會シ談コレニ及ブ相識者云
ク圖ハ實ニ余ノ草スル所ナリ余曩キニ數十圖ヲ作り而シテ
目ノ似タルモノ之ヲ截リ鼻ノ似タルモノ之ヲ截リ耳口眉毛
ノ似タルモノ一々撰ラシテ之ヲ截斷シ湊合シテ假リニ板面
ニ按排シ紙ヲ其上ニ掩フテ之ヲ影摹ス故ニ位置未タ属セザ
ルナリ時ニ圖ヲ需ムルモノ甚タ急ナルニ因リ先ツ之レニ示
スニ未定稿ヲ以ス圖ハ便チ是レナリトテ其圖ヲ示サレタリ

嗚呼横山氏畫ヲ看ルノ眼力其レ高シト云フベシ

○河野源八の美談

愛媛縣下伊豫國松山ニ河野源八ト云人あり早く父を喪ヒ母
に事テ孝かり年三十ニして妻を娶ル其妻間も亦難病ニ罹
リ足腰痠へ麻痺れ起臥も自由ならざりしニ源八ハ聊か厭ふ
氣色なく藥餌飲食より其外萬事深切ニ介抱し三年の月日と
送りしが源八ハ素より一箇の職人にて外ニ助けも無く手一
つよて老母病妻を養ふ事ゆへ家業もハかくしからず自然
勝手向も不如意なるを見て親類の者等源八を勧めて其妻と
離縁せんとす源八云く我が妻を娶るハ素より苦樂を共にし

偕老同穴を期せしめて一旦難病に罹り不自由の身と成りたりとて之を去らば他日我んし病で難儀せば人も亦捨て去らんとす且又彼の愈々便り無き身とあらん實に愍然ならずや我れ是の薄情なるに忍びざるなりとて遂に其言を用いざりしと後ち妻の病も全快し共々母の事て孝養を盡し紡績勉強して怠らず遂に家産を興し富有の身とあり今ハ何の不自由もなく暮しければ人皆感しあへりとぞ

一本誌定價三錢五厘〇十冊以上ハ一割引〇三十冊以上ハ一割五分引〇六十冊以上ハ二割引
 右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼
 編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

博聞社

本局

加賀國金澤町

益知館

賣 捌 所

西京古門前三吉町	博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南 _三 入	全分社
千葉縣下寒川	全分社
埼玉縣下浦和驛	全分社
東京常盤橋前	全支店
加賀國金澤上堤町	中村喜平
同 安江町	近田太平
同 堤町	野島信吉



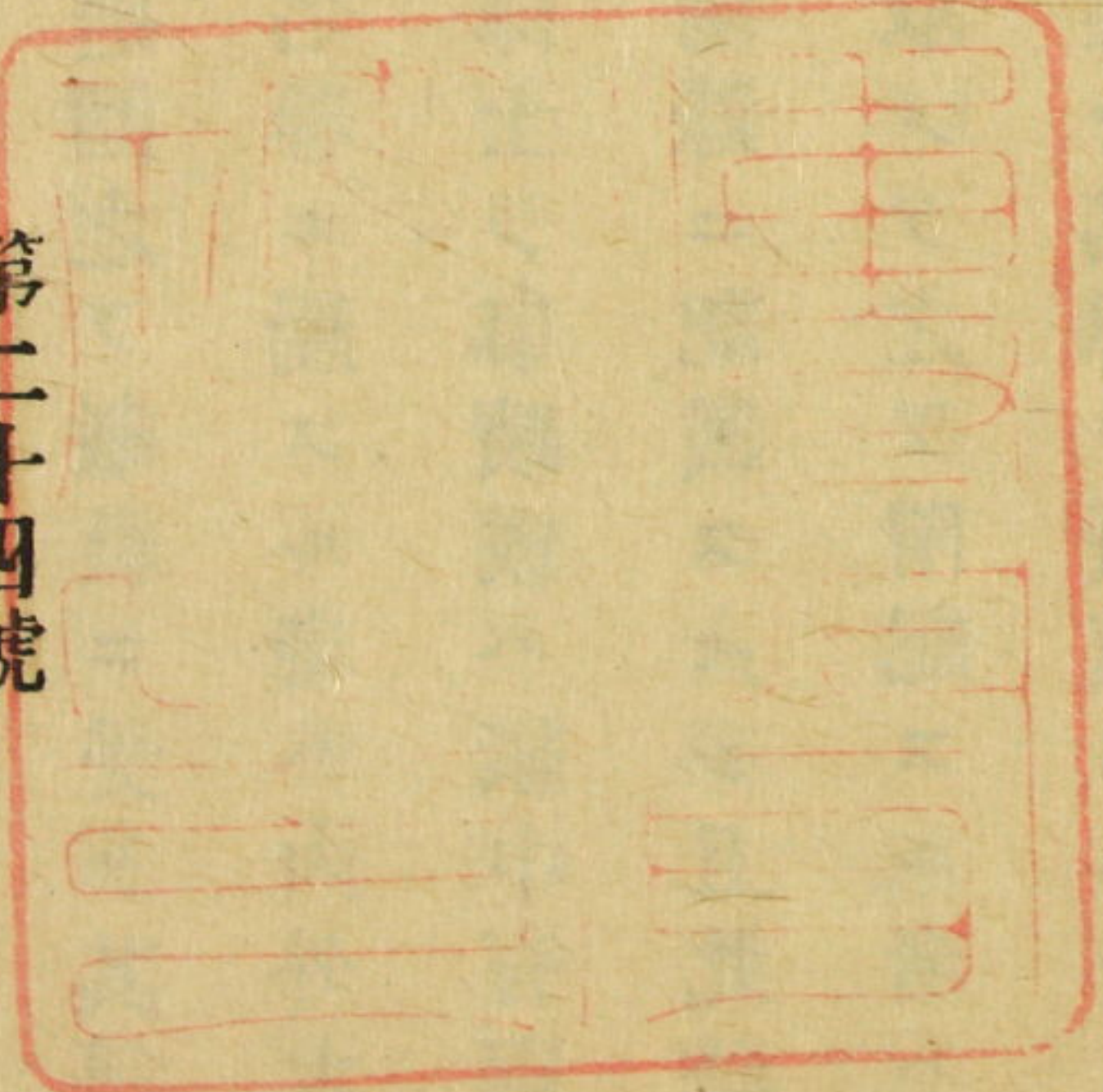
明治十年一月十八日發兌

山田原欽ノ傳

小野湖山ノ事蹟

烈婦蓮月ノ記事

名譽新誌



第二十四號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ヲ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ識リ勸懲ノ一端タラシヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニ報告ヲ賜ハ、幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十四號

○山田原欽ノ傳

君名ハ熙復軒ト號ス原欽ハ其通稱ナリ本清田氏後チ外家ノ氏ヲ冒シテ山田ト稱ス周防ノ人即チ毛利家ノ臣ナリ君幼ニノ聰敏好シテ書ヲ讀ミ字ヲ畫ス五歲初テ大學ヲ讀ム或人間テ曰ク兒ノ讀ム所ロハ何ノ書ソヤ君答ヘテ曰ク大學ナリ又問テ曰ク書中何ノ述ル所ロソ君曰ク都テ是レ修身齊家治國ノ事恨ラクハ未タ之ヲ身ニ行フ能ハサルノミト問者大ニ歎異ス十一歲ノ時其父三休周防ノ地ハ僻陋ニシテ其師ト爲スベキ者無キヲ以テ君ヲ携ヘテ京師ニ上ル

天皇其疾カニ成ルヲ以テ或ハ宿構ナルカト疑ヒ又詔シテ舶來ノ唐才子傳ヲ讀マシム音吐清暢一字ヲ錯ラズ聽者耳ヲ傾ケリ時ニ柁井盛胤法親王 御坐ノ側ニ侍ス

天皇親王ヲ顧テ曰ク此兒見ル所聞ク所ニ過キタリ顔淵閔子騫復タ今世ニ生レタリト謂フベシト乃チ賞賜アリ妙法院堯恕親王深ク君ノ才ヲ愛シ伊藤坦庵ニ命シテ君ノ師トナラシム君坦庵ニ事ヘテ弟子ノ道ヲ竭シ晝夜孜々トシ殆ント手ニ卷ヲ釋カザリキ坦庵嘗テ五經ノ訓點ヲ改ム君其事ニ預リ討

論虛日無シ坦庵モ亦深ク君ヲ愛シカヲ盡シテ教授セリ十二歳ノ時盛胤法親王君ニ命シテ天台山ノ賦ヲ作ラシム纔ニ半晷ニシテ就ル凡テ八百二十字ナリ君十四歳藩主毛利吉就公ニ從テ江戸ニ趣キ侍讀ト爲ル旦夕典籍ヲ講論ス公待遇甚タ厚シ曾テ夜諸臣ヲ召テ宴ヲ開ク君モ亦預レリ宴酣ナル時公君ニ命シ蠟燭ヲ刻シテ詩ヲ賦セシム燭燃テ一寸ニ及バザルニ己ニ二絶句ヲ賦ス公重テ命ス又三絶句ヲ賦セリ又七步ノ詩ヲ命ズ君言ニ應シテ起チ六步ニシテ就ル公席ヲ打テ歎賞良久フシテ曰ク汝カオハ曹子建ニ勝ルコト一步實ニ吾國ノ寶ナリト諸侯君ノ名ヲ聞キ乞テ其亭ニ記セシムルモノ多シ君

十六歲江戸ノ邸ニ在リ一日高野寺ニ遊フ寺僧某君ニ謂テ曰
ク弘法大師著ス所ノ文集七卷アリ高野山ヨリ將軍ノ覽ニ供
ス今藏メテ此寺ニ在リ字皆篆隸ニシテ未タ嘗テ了讀スル者
ナシ拙道子ノ名ヲ聞クヤ久シ子幸ニ我カ爲ニ之ヲ授讀セヨ
君進デ之ヲ讀ミ因テ其義ヲ説ク辨論清晰ニシテ毫モ凝滯ナ
シ寺僧某驚異シテ曰ク若シ大師ヲシテ之ヲ聞カシメハ將ニ
必ズ千歲ノ子雲ヲ得ルトセン天和二年壬戌朝鮮人來聘ス君
其旅館ニ就テ之ヲ見ル酬唱數篇ニ至ル韓客深ク之ヲ奇トシ
歸路君ノオヲ念テ自ラ己ムヲ能ハズ蒲刈浦ニ到リ書及ヒ詩
ヲ寄セテ別ヲ悵ムノ意ヲ示セリ是ヨリ君ノ名大ニ天下ニ振

フ公君ヲ待遇スルヲ益ス厚シ江戸ニ往ク毎ニ必ス君ヲ携ヘ
疑事アレハ必ス訊問ス又議シテ牟利家世々藏スル所ノ秘書
若干卷ヲ校セシム君繁亂ヲ刪リ謬誤ヲ定メケレハ次叙始テ
正キヲ得タリ是ヨリ先キ公僧惠極ヲ鍾愛ス惠極ハ奸佞利ヲ
營ムモノニシテ衆望大ヒニ負ク然レモ狐媚ヲ公ニ獻スルヲ
以テ特ニ寵遇ヲ受ク君屢々之ヲ言フ用ヒラレス返テ惠極ノ
爲ニ一大伽藍ヲ創設シ名ケテ東光寺ト爲ス君豫メ諫メテ之
ヲ止メントス聽カス公江戸ニ在ルニ當テ君復諫ルヲ屢々然
レモ言ノ用ヒラレザルヲ以テ憂悶措ク克ハス一夕公ノ寢所
ニ就キ泣血熟諫シテ曰ク臣カ忌諱ヲ避ケス嚴譴ヲ顧ミズシ

テ極言スル所以ノモノハ固ヨリ他心アルニ非ルナリ只君威
ノ重ンス可キト民望ヲ繫グニアルノミ今妖僧ノ爲ニ極大壯
麗ノ一字ヲ開創シ民ヲノ蹙頹阿房宮ノ誹ヲ爲サシムルハ豈
君上ノ甘シテ爲ス所ナランヤト辭氣壯厲顔色常ニ異ナリ已
ニシテ退ク公動止ノ常ナラサルヲ怪ミ左右ヲシテ就テ之ヲ見
セシムレハ則チ己ニ屠腹シテ死セリ實ニ元祿六年七月十四
日ナリ年二十八君身ヲ守ルテ嚴ニ事テ孝ナリ而シテ其
君ニ事ルヤ雞鳴テ出テ星ヲ見テ歸ル一日モ他事ヲ以テ辭セ
ス公ヨリ退ケハ則チ油ヲ燒テ書ヲ讀ミ三更ニ到テ而シテ後
ニ寢ヌ常ニ以テ例トナスト其著ハス所ロノ詩文集自余若干

卷アリ今悉ク傳ハラズ惜哉偶マ君ノ詩一首ヲ得タリ仍テ左
ニ記載ス

丁卯歲旦

十齡奔走盡天涯。詞賦相隨動滿車。沙暖不驚南渚雁。春回已發北
枝花。安知縫掖非身計。空有丹心值歲華。一夜篝燈照殘臘。起聞晨
鼓是誰家

○小野湖山ノ事蹟

君名ハ卷字ハ懷之一ノ字ハ舒公晚ニ又名ヲ長愿字ハ侗翁ト
更ム湖山及ヒ狂々ノ號アリ近江國淺井郡ノ人後チ舊吉田藩
ニ仕フ君系ハ參議小野公ニ出ツ中古故國ノ地名横山ヲ以テ

氏トス近ゴロ本姓小野氏ニ復スト云フ君久シク江戸ニ住シ
詩ヲ以テ天下ニ名アリ交道頗ル廣シ平素邊幅ヲ修メズ必ラ
ズ真率ヲ以テ人ニ接ス人一見スレハ則チ服ス性狂戇狂直憂
國ノ念極メテ篤シ往年開鎖ノ事起ル君勞心焦思シテ頃刻モ
之ヲ懷ニ忘ル、能ハズ癸丑以後ニ至リ孳々汲々百事ヲ擲チ
危艱ヲ涉リ常ニ有志ノ士ニ結托シ或ハ當路ノ門ニ奔走シ心
カヲ竭クシテ以テ國家ニ報セント欲ス故ニ藩主ニ勸ムルニ
直言強諫ノ義ヲ以テスルト數々而シテ省セズ福山侍從ノ政
ヲ執ルニ當リ其臣某ニ因テ守禦ノ議ヲ獻ス又彦根中將ノ政
ヲ執ルヤ其臣某ニ因テ内外處置ノ略ヲ獻シ或ハ危言以テ聳

動ス一友人アリ其人ヲ擇ハスノ妄發スルヲ咎ム之ニ答ヘテ
曰ク時情切迫ナリ豈之ヲ擇フニ暇アラシヤト平生藤田東湖
ト最善シ因テ其志ヲ以テ水戸景山老公ニ達シ侯家ノ事ヨリ
國家内外ノ事ニ至ルマデ指陳セザルナシ又梁川星巖ト善シ
議論相資トシ郵筒往復因テ言ヲ 天朝ニ獻ゼント欲ス又
規スニ出位ノ罪ヲ以テス君曰ク是レ納約自牖ノ義ナリ且國
家ノ外寇アルハ猶父母ノ激疾ニ罹ルガ如シ苟モ之ヲ救フノ
道ヲ求メント欲セバ區々ノ罪譴何ソ顧ミルニ足ラン癸丑ノ
秋幕府列藩ニ諭トスノ令ヲ讀ミ慨歎數日偶マ中島長藏浦賀
ヨリ來ル談邊事ニ及ヒ相共ニ號泣シ乃チ詩(今之レヲ畧ス)ヲ

作テ之ニ贈ル長藏ハ二本松ノ人ナリ黄山ト號ス亦慷慨奇傑
ノ士ト云フ丁巳ノ冬大學頭林君幕命ヲ奉シテ 皇京ニ使ス
君曰ク是レ猶庶幾スベキノ時ナリト乃チ又詩(又略ス)ヲ作テ
其行ヲ送ル林君左右ト其詩ヲ讀ミ憮然タリ君毎ニ杜子美ノ
避人焚諫艸ノ句ヲ誦シテ曰ク人臣ノ義當サニ此ノ如クナル
ベシ故ニ前後上書獻言一モ其稿ヲ留メズ戊午ノ獄起ルニ及
ンデ天下ノ名士逮捕セララル、者甚タ多シ事ノ曲直虛實ヲ論
セス威暴慘刻實ニ言フベカラズ西ニ在テハ則チ梁川星巖梅
田雲濱賴三樹東ニ在テハ藤森弘庵大橋訥庵日下部伊三次勝
野豐作ノ如キ皆君ノ親善スル所口故ニ諸友皆君ノ爲メニ之

ヲ危ム而メ君猶自カラ奔走力ヲ盡シ數子ノ爲メニ其冤ヲ雪
カント欲ス此レニ因テ遂ニ罪ヲ其藩ニ得ル竄逐セラレテ府
下ニ住スルヲ得ズ君是ニ於テ越信ノ行アリ然レモ人皆幕威
ヲ怖レ其連累ヲ恐ル故ニ到ル處口落魄久シク留ルヲ得ズ既
ニメ又其藩ニ誘致セララル世議ノ紛々タルヲ以テ其國ニ禁錮
シ吏卒監護嚴トメ囚獄ノ如シ君詩ヲ作り懷ヲ述フ絶テ怨憤
ノ色ナシ而メ憂國ノ志益マス切ナリ吏卒或ハ語ルニ東西ノ
變故ヲ以ス則チ默メ而シテ答ヘズ屋ヲ仰ゲ長歎ス然レモ君
素ト温厚其議論モ亦世ノ過激粗暴ノ輩ト同シカラズ故ニ其
或ハ洋人ヲ殺サンヲ謀リ或ハ黨ヲ集メテ兵ヲ擧クル等ノ事

ヲ聞クハ則チ又歎メ曰ク粗謀淺慮徒ニ自カラ禍スルノミ
何ソ國家ニ補アラシ其志一ニ藩治ヲ整ヒ幕政ヲ正フシ皇威
ヲ宣揚シ以テ外寇ヲ扞禦スルニ在リ而シテ確乎變移ナキナ
リ吏卒初メ其脫走ヲ畏レ監護極メテ嚴ナリ後チ其怨憤ノ色
ナキヲ見テ皆頗ル親服ス或ハ竊カニ美酒佳肴ヲ贈リ詩或ハ
書ヲ乞フモノアルニ至ル文久三年罪名全ク除カル明治戊辰
ノ冬朝命アリ徵士權辨事トナル明治二年母ノ病ヲ以テ職ヲ
辭ス又藩ノ少參事トナルヲ數月ニシテ退隱ス四年東京ニ轉
住シ以來詩客文人ト交ヲ結ビ翰墨林ニ逍遙シテ風月ヲ樂ム
ト云フ

○烈婦蓮月の記事

蓮月ハ京師智恩院雜掌某の女なり其姓氏を詳にせず蓮月を
以て聞ゆ性聰慧にして姿貌絶だ美なり文墨を習ひ和歌を能
し又陶器の妙を得たり或る一賈人ニ嫁せし偶々其夫外
妾に溺れ蓮月を顧みず蓮月ハ聊か嫉妬の色なく益々貞節
を盡せり實父母其婿の放蕩無賴なるを見て蓮月を愍み離婚
せんとせしが蓮月肯せずして曰く古語にも烈婦ハ二夫を見
へずと良人の放縱なるハ妾か之れニ事ふるの道未だ至らざ
るなり今之と離婚せば却て妾か過を世に見すなりと父母亦
之を強ひず其意に任せたり其後夫蓮月の誠意に感し繼

然として其行を改めたりとぞ斯る放縱をなせしより家産も
壊れ勝手向不如意の折柄夫又難病に罹り愈々困窮せしか
バ蓮月の別ふ一小店を開き茶を煮て客に供し細き煙を騰げ
て其日を送りしと竟に夫死し孑々寡居せり時二年未だ三十
に満ちざれば或いは人の侮りを受けんと畏れ髪を削て尼と
なりし蓮花水を出て、影淨く月色秋を過ぎて光朗なり瀟
洒の姿更に一層の美を加へければ少年輩或は艶書を投し慙
と通ずるものあり蓮月乃ち千斤の秤を引て自から其齒
と抜き去る肅々聲あり滴々血を迸しる觀者大いに驚て曰く
烈婦々々とは是より蓮月の名天下に高し蓮月手から急須を製

し蓮花を印して之を賣る蓮月の急須と唱へ遠近之を購求
貴重しければ大いに蓄財し富有の身とされり性慈愛として
能く人と恤む盜賊あれは先づ金を與へ且つ諭して曰く汝も
斯る悪業を爲し身を亡す勿れ之を以て資本とし早く正業に
就げと賊大いに感悔し善人と成る者多く有りしとぞ島原の
遊廓に一妓あり櫻木と云ふ頗る文才あり蓮月一見して數百
金を擲て之を購ひ己れか弟子とし櫻木と改稱す後ち果して
歌を以て聞ゆ斯くて蓮月の歌名四方に喧しく歌人等來り訪
ふもの日一日よりも多し蓮月之を嫌ひ避けて年々數回其居
宅を移せり年七十有餘にして歿すと云ふ嗚呼蓮月を節操風

流併せて之れと有す蓮月の名其實ふ適ふと云ふへし

第二十一號正誤

三葉第六行 (騎兵隊長)ノ騎ハ(奇)ノ誤

五葉第一行 (天年)ノ間タニ(之レニ)ノ三字ヲ脱ス

同 第二行 (如何)ハ(奈)ノ誤

六葉第十行 (稱宜)ハ(禰宜)ノ誤

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼

編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

博聞社

本局

加賀國金澤町

益知館

所	捌	賣
同	同	同
堤町	野島信吉	野島信吉
安江町	近田太平	近田太平
加賀國金澤上堤町	中村喜平	中村喜平
東京常盤橋前	全支店	全支店
埼玉縣下浦和驛	全分社	全分社
千葉縣下寒川	全分社	全分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南 _三 入	全分社	全分社
西京古門前三吉町	博聞分社	博聞分社



明治十年一月二十日發兌

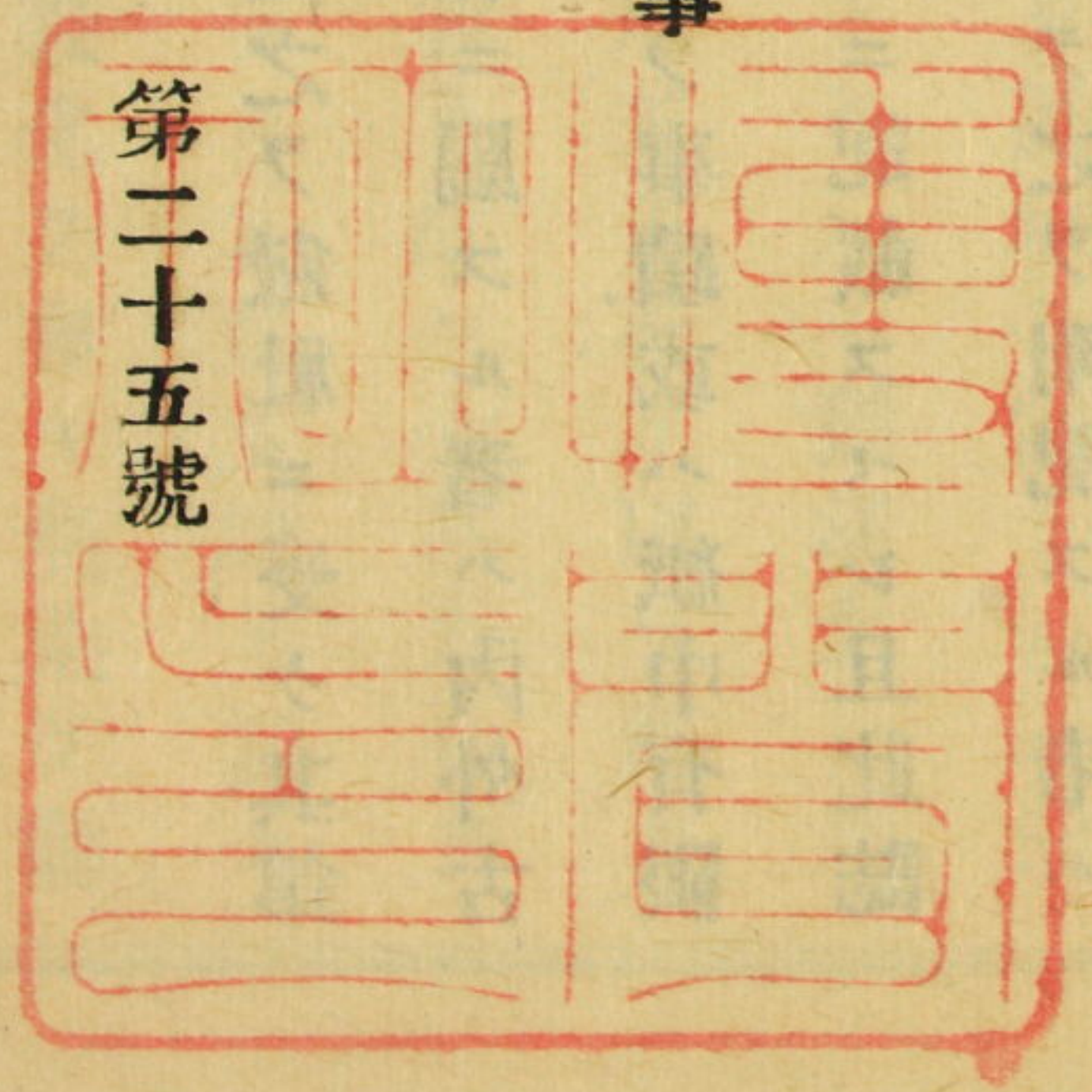
山内鴻谷ノ傳

渡邊清君ノ小傳

錦織晚香ノ小傳

上湊正義學事ニ盡力セシ記事

名譽新誌



第二十五號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ識リ勸懲ノ一端タランヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニノ報告ヲ賜ハ、幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十五號

○山内鴻谷ノ傳

君名ハ董正字ハ治卿鴻谷ハ其號ナリ君人ト爲リ風流温藉學ヲ好ミ詩ヲ賦シ最モ心ヲ民事ニ留ム人ト交ルニ畛域ヲ設ケズ家世々舊幕府ノ小吏タリ君ニ至リ始テ民政ヲ掌トルト云當時國家ノ制代官ヲ置キ以テ民政ヲ掌トラシム猶漢土ノ郡守縣令ノ如キナリ其管スル所口大率予地五万石ヲ以テ準トナス而シテ其才幹ノ優長ニ因テ其地ヲ増ス故ニ七八万石ヨリ十五六万石以上ニ至ルモノモ亦之レアリ其度支局ニ隸スルヲ以テ班甚タ貴カラサルナリ然レモ教化ヲ布キ農桑ヲ勸

メテ以テ國本ヲ固フスルニ至テハ此職ヨリ要ナルハナシ君
初メ度支局ノ屬吏ヲ以テ野州ノ東郷公廨ニ來ル實ニ天保癸
卯六月ナリ時ニ管内土地瘠薄民租稅ヲ難シトシ相胥ヒテ未
ヲ追ヒ唯利是レ視ル其甚シキニ至テハ強暴無賴遂ニ博徒草
竊ノ流ニ入ル是ヲ以テ田地日ニ荒レ逋債歲ニ加ハル君之ヲ
憂ヒ乃チ郡中ノ吏民ヲ集メ說クニ農事ノ重キヲ以テス循々
誘導苛酷ヲ尙バズ公暇ニハ單騎僮僕ヲ從ヘズ畎畝ノ間ニ往
來シ村民ノ疾苦ヲ訪察シ盛夏隆冬殆ント虛日ナシ嘉永戊申
幕府君ノ其職ニ稱フヲ嘉ミシ代官ニ選任ス徒テ眞岡公廨合
東郷ニ居ル管スル所凡ソ七萬石君愈々精ヲ勵マシ職ヲ奉

ズ最モ意ヲ墾闢ニ注キ僚吏桑名直行二宮尊徳ヲシ其事ヲ董
サシム數年ノ間荒蕪ヲ闢キ良田トナシ高低ヲ平カニシテ林
圃トナス禾稼雲ニ連ナリ美材霄ヲ凌ク眞岡ヨリ谷田貝ニ抵
ルマテ狹路迂回荆棘塞カリ往還孔々艱ム君即チ命シテ芟鋤
開拓シ平ナルト砥ノ如シ其他所在ノ道途橋梁ヲ修補完繕シ
溝ヲ浚ヘ池ヲ鑿リ以テ灌漑ニ便ニヌ義倉ヲ創メテ以テ凶荒
ニ備フ老羸ヲ卹ミテ以テ孝悌ヲ厚フス居ル數年強暴無賴ノ
民面ヲ革メ復藉スル者甚タ衆シ君嘗テ試ミニ數畝ノ田ヲ僦
シ躬カラ耕穫シテ租稅ヲ輸ス其羸餘ノ鮮少ナルヲ見テ乃チ
歎シテ曰ク吾益ス稼穡ノ艱難ナルヲ知レリト其至誠心ヲ民

事ニ用フル此ノ如シ君燕息ノ亭ヲ南兵ニ構ヘ花ヲ栽ヘ水ヲ環ラシ月夕花晨毎ト野老田翁ヲ其中ニ招キ酒ヲ置ク吟詠暢然自適ス其詩雕琢ヲ務メズ字句多ク黎ヲ育シ農ヲ勸ムルノ事ヲ賦ス亦以テ感興ノ寓スル所ヲ觀ルニ足レリ安政戊午台命ヲ以テ任ニ駿河ノ府中ニ遷ル萬延庚申七月十五日老病ヲ以テ其公廨ニ歿ス年七十有二後チ郷ノ老吏等相謀テ石ヲ東郷大前神祠ノ側ラニ建テ題シテ山内明府功德ノ碑ト云フ

○渡邊清君ノ小傳

君初名ハ範助後チ清左衛門ト稱シ又今ノ名ニ改ム舊大村藩ノ士ナリ弟昇君ト共ニ夙トニ勤王ヲ以テ著ハル(昇君ハ別ニ

傳アリ)舊藩主大村純熙公ヲ輔翼シ正議ヲ天下ニ伸ヘント欲ス而シテ大村ノ藩タル疆狹クシテ力微ナリ且ツ前ニ長崎鎮臺アリ其舉動ヲ探リ竊カニ幕府ニ訴ヘ後ニ佐賀藩アリ其虛隙ニ乘セントスル者ノ如シ公之ヲ憂フ君同志ト之ヲ議シテ曰ク今速カニ爲スコトアラント欲ス恐ラクハ一敗事ヲ誤ラン如カズ暫ラク形ヲ潜メテ時機ヲ待タンニハ平戸藩人ハ樸直能ク守ル宜シク之レト締交シ緩急相應スベシト公其議ニ從ヒ君及ヒ參政庄新右衛門ニ命シ平戸ニ使セシム是ニ於テ二藩親睦ノ事始メテ成ル是ヨリ先キ幕府大舉シテ長州ヲ征ス公以爲ラク長ノ賊名ヲ冒スモノハ勤王ノ至誠自カラ抑ユル能

ハサルニ出ツ若シ長ヲシテ敗燼ニ属セシメハ勤王ノ諸藩復
タ振ハス宜シク幕府ヲメ兵團ヲ解カシムヘシト乃チ止戦論
一篇ヲ作り君及ヒ庄新右衛門ヲメ之ヲ齎ラシ小倉ニ往キ之
ヲ松平越前寺ニ達セシム越前守之ヲ受ケ且曰ク尾張大納言
ト之ヲ議セント慶應元年四月君及ヒ十九眞衛藩命ヲ受ケテ
對馬ニ航ス對馬ハ勤王ノ一藩ナリ而シテ姦吏暴行妄リニ正
議ノ士ヲ斃シ執政大浦教之助等百餘人之レニ死シ藩内大ニ
亂ル薩長諸藩使ヲ遣リ之ヲ救フ君薩長ノ諸士ト共ニ之ヲ周
旋ス五月姦魁刑ニ就キ一藩稍ヤ治ル是ニ於テ歸國ス是年福
岡藩内訌ノ事アリ勤王ノ士或ハ獄ニ就ク者數十名君又藩命

ヲ受ケ往テ其情ヲ探リ且ツ説テ之ヲ救ハント欲シ單身筑ニ
入り將サニ立花嶺ヲ越ヘントス人アリ嶺上ヨリ下リ來ル之
レヲ見レハ則チ其弟昇君ナリ昇君モ亦公命ヲ奉シテ東西ニ
奔走シ時ニ筑前ヲ經テ歸ルナリ曰ク筑前ノ情態我レ之ヲ審
カニスルコトヲ得タリ今日ノ勢一書生ノカラ能ク救フヘキニ
非ス先ツ我カ藩論ヲ一定シ堂々トシテ使節ヲ出シ以テ之ヲ
説クニ若カス又相議シテ曰ク昇ハ速カニ藩ニ歸レ吾ハ直ニ
平戸ニ赴キ相共ニ使節ヲ出サシメ戮力シテ之ヲ救フベシト
途上議ヲ決シテ別ル此ヨリ君平戸ニ至リ説クニ憂國ノ士救
ハザル可カラザルヲ以テス平戸藩之ヲ諾ス尋テ藩ニ歸レハ

藩論既ニ定マリ使節將サニ途ニ上ラントス君亦平戸ニ往キ
テ使節ヲ促シ筑前ニ到レハ大村ノ使節既ニ福岡ニ達セリ執
政江頭隼之助渡邊昇等使節タリ而シテ待ツコ四五日平戸ノ
使節未タ至ラズ然モ其事遲緩スベカラザルヲ以テ大村ノ一
行人福岡城ニ入り論スルニ大義ヲ以テシ且ツ公ノ書ヲ出ス
其略ニ曰ク聞ク貴藩憂國ノ士ヲ幽囚スト是レ何等ノ事故ニ
出ルヲ知ザレモ天下今日ノ形勢ニシテ貴藩ノ此事アル豈ニ
顰願セサルベケンヤ願クハ其恕シ難キヲ恕シ以テ四十餘名
ヲ寛宥シ報國ノ元氣ヲ擴張セハ純熙小藩ナリト雖モ驥尾ニ
隨ヒ以テ微誠ヲ盡ス所アラントスト福岡ノ執政輩唯其厚意

ヲ謝スルノミ敢テ決答スルコ能ハズ彌々論スレハ彌々疑ヒ
終ニ喩スコ能ハス浩歎シテ歸ル十月君又公ノ内旨ヲ承ケ島
原ニ至リ隣交ヲ厚クセンコヲ謀ル十二月公大ニ兵制ヲ改メ
君ヲ以テ兵學指南ノ職ニ任ス是ヨリ先キ英國練兵書始メテ
長崎ニ至ル公其法ヲ奇トス而シテ藩士ミナ洋制ヲ悅ハズ此
ニ至リ公斷然君等六七輩ニ命シ長崎ニ往キ之レヲ學バシム
歸レバ則チ公自ラ洋銃ヲ把テ英制ヲ學ヒ以テ一藩ノ兵制ヲ
定ム三年正月三日夜賊アリ執政針屋九左衛門ヲ暗傷シ文館
教授松林漸ヲ暗殺ス九左衛門ハ剛直敢爲慨世ノ志ヲ抱キ漸
ハ方正ニシテ文學ニ長シ氣節甚タ高シ皆一藩ノ人材ナリ而

シテ此ノ禍ニ逢フ奸徒ノ爲ス所口知ルベシ是ニ於テ藩内ノ志士四十餘名文館ニ會シ誓テ賊徒ヲ捕獲シ一藩ヲシテ名義ノアル所ヲ知ラシメンコトヲ請フ公之ヲ許シ君等三四名ヲシテ之レヲ總括セシム藩主ノ同盟戮カスル者二百餘人ニ至ル四月遂ニ賊ヲ獲タリ奸徒二十餘名盡ク罪ニ伏ス即チ首ヲ梟シ從ヲ斬ス是ニ於テ一藩肅然方向一ニ決シ争フテ王事ニ斃レンコトヲ希フト云フ六月公君ニ命シテ曰ク王政恢復ノ機失フベカラズ汝宜シク新精組ヲ率井テ京師ニ上リ薩ニ依リ以テ余カ積年勤王ノ素志ヲ貫クベシト是ヨリ先キ大村ノ壯士輩同盟立誓シテ事アルノ日ハ常ニ先鋒トナリ死ヲ以テ國ニ

報センコトヲ請フ公之ヲ許シ君ニ命シテ統括指揮セシム之ヲ新精組ト名ツク此ニ至リ新精組ヲ率井テ上京ス

(以下嗣號ニ詳記スベシ)

○錦織晚香ノ小傳

名ハ積初名良藏晚香ト號ス磐城舊中村藩ノ士ナリ少壯郷ヲ出テ古賀侗庵ヲ師トシ昌平學ニ入り日夜研精業大ニ進ミ遂ニ舍長トナル時ニ察法整肅一時俊髦ノ士四方ヨリ群至ス賴三樹三郎多田彌太郎(銀山殉難ノ奇士)等年少氣銳降挹スル所ナシ獨リ翁ニ畏服ス三樹三郎ハ殊ニ才氣ヲ負ヒ侗儻不羈ナリ翁曾テ之レニ戲レテ曰ク吾子名ハ三木(後チ三樹ト更タム)

恐ラクハ他日或ハ三木(杻械枷)ノ禍ニ逢ハン慎テ刑ニ近ツク
ク勿レト後チ果シテ讖トナル翁大ニ悼惜シテ止マズ居ル
ト數年博ク經史ニ涉リ旁ハラ詩文ヲ能クス最モ三律ニ精シ
學既ニ成リ郷ニ歸ル藩侯相馬氏擧テ儒官トナシ政事ニ預ラ
シム乃チ養老及ヒ藉田ノ儀式ヲ重修シ旌表ノ廢典ヲ興シ以
テ教化ヲ助ク而シテ藩侯及ヒ貴戚皆師資ス翁兼テ武技ヲ能
クス最モ劍術ニ長ズ曾テ其師範ニ補セラル且ツ才敏能ク吏
務ニ通ス是ヲ以テ累遷ノ參政ニ至ル要劇ニ居ルト二十餘年
恪勤怠ラザル一日ノ如キナリ其間數々東京ニ祇役ス交ハル
所口皆有名ノ士ナリ弱冠林鶴梁ノ紹介ヲ以テ藤田東湖ニ詣

ル一見目スルニ奇士ヲ以テス次テ羽倉簡堂安井鹽谷芳野諸
名家ト相共ニ藝苑ニ周旋ス簡堂嘗テ翁ノ詩文ヲ評シテ曰ク
「前略」錦君詩文亦在吾人品上我師精里淡窓二先生品下然リ
而シテ一讀不能止者其人在二先生之域故乎其先輩ニ推サル
、此ノ如シ然レモ名甚タ顯レサルモノハ恒ニ僻陋ニ居リ都
下ニ在ルノ日淺ケレバナリ戊辰ノ亂奧羽ノ盟主其兵ヲ遣ハ
シ中村城南ニ屯營シ以テ官軍ニ抗セシム官軍漸ク迫ルニ及
テ藩侯大義ニ仗リ潛カニ歸順ヲ乞ヒ城ヲ開テ官軍ヲ迎ヘン
トス此際屯兵猜防益ス嚴ナリ而シテ重臣藩老ニ迫リ強ヒテ
老公ヲシテ仙臺ニ避ケシメントス蓋シ之ヲ質トスルナリ此

ヨリ前泉。湯長谷。平。三藩ノ公族皆仙臺ニ避ク故ヲ以テ督促尤
モ甚シ翁時ニ軍職ニ在リ即チ營中ニ赴キ辨論反復聲色俱ニ
厲シ重臣遂ニ奪フ可ラサルヲ知り其夜潛カニ營ヲ境外ニ移
セリ是ヲ以テ官軍一戰ニ及ハズ直ニ城ニ入り城下兵燹ノ害
ヲ免ルヽコヲ得タリ而シテ老公モ亦恙無シ是レ翁舌戰ノ力
ト謂ハザルヲ得ンヤ時ニ詩アリ殺氣滿軍營王師將入城誰知
歸順際談笑卻屯兵藩侯多年ノ勳勞ヲ賞シ其祿ヲ倍賜ス維新
ノ初メ集議院ヲ東京ニ開キ各藩ニ令シ代議士ヲ出サシム時
ニ翁藩選ヲ以テ議員ニ充ツ數々幹事トナル議論明暢實ニ議
員中ノ翹楚タリ廢藩以降意ヲ仕路ニ絶チ土著歸農寂寞ノ濱

ニ居リ恒ニ文史ヲ以テ自カラ娛ム齡己ニ耳順ヲ踰ユルト云
フ

○上湊正義學事ニ盡力せし記事

岡山縣下第六大區四小區湊村保長上湊正義ハ性質淳良志操
清高ニして専ら學事ニ力を盡し既ニ三年前ニ一校を其郷里
ニ新築せしか昨年又一校を新構せり其入費多クハ正義の自
から出す所ニして金高ハ凡ろ二百五拾圓あり正義ハ常ニ弊
屋ニ安居して苟も虚飾を好まず家事を捐て私財を傾けて皆
之れを學費ニ供し常ニ少年輩を勸導し學生を愛遇し職務彌
く擧りて勤勞益々深く人之れニ築校の入費を問ヘハ黙

して答へず常と謂て曰く我れハ皆國家の爲として私の爲め
よせず敢て世俗の其功名を銜賣して漫りよ官の褒賞を貪る
よ傲ハざるなりと其志行の高古あるよと誰れ獨り稱賛せざ
るものあかりしが間もあく官よ聞え昨年褒美として銀盃一
箇を下賜されしと云ふ

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一
割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸
事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼
編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

博聞社

本局 加賀國金澤町

益知館

賣 捌 所

西京古門前三吉町	博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南入	全分社
千葉縣下寒川	全分社
埼玉縣下浦和驛	全分社
東京常盤橋前	全支店
加賀國金澤上堤町	中村喜平
同 安江町	近田太平
同 堤町	野島信吉



明治十年一月二十七日發兌

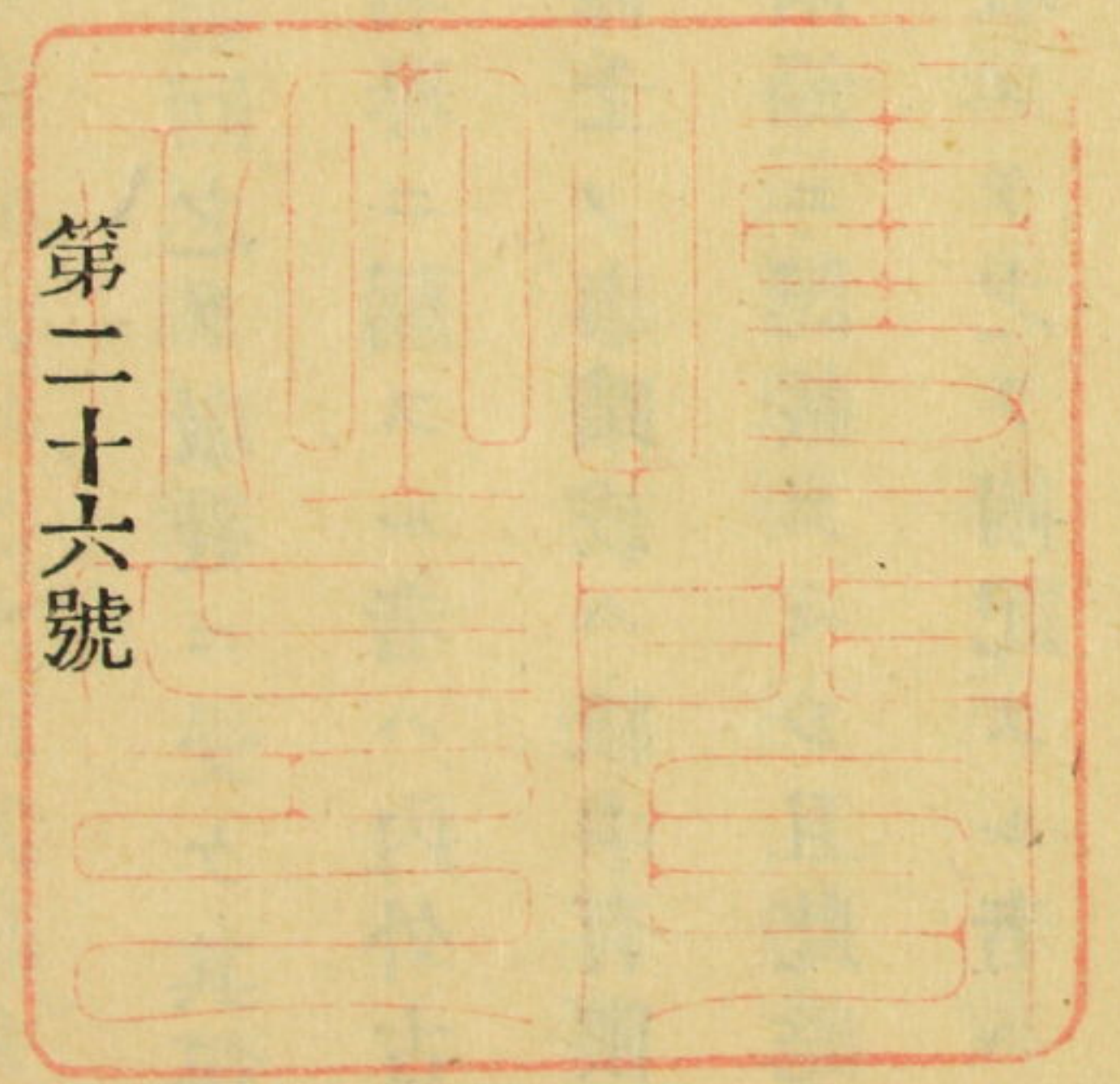
菅野白華ノ傳 附書懷一詩

渡邊清君小傳前號ノ續キ

香川敬三君小傳

孝女森藤婦由ノ記事

名譽新誌



第二十六號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ識リ勸懲ノ一端タランヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニ報告ヲ賜ハマ幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十六號

○菅野白華ノ傳

博物洽覽君ノ如キ人ト雖モ當時幕政ノ秕惡ナルニ因テ下位ニ沈淪シ其驥足ヲ展フル能ズ後チ幸ヒニ明治維新ノ聖代ニ逢フモ又群小ノ爲メニ其途ヲ妨ケラレ遂ニ空シク黄泉ノ客トナル洵トニ惜ムベキナリ今川田氏撰フ所ノ碑文ヲ左ニ掲載シ以テ其傳ニ換フ讀者宜シク之レニ由テ其事蹟ノ顛末ヲ知ルベシ

○菅野先生墓表

川田 剛

菅野先生既亡之五年。其義子正盛。介伊藤介夫來。乞余表其墓。余

數奇

讀狀不覺折胸嘆曰。嗟呼。文人數奇。未有甚於先生者也。曩時幕府為政。列藩用人。專遵資格。上自卿大夫。下至百執事。皆世其職。間有治覽博物如先生者。以門寒族微。沈淪下位。不得展其志。况眾忌所擠。奇禍瀕死。屈亦甚。然此猶諉曰。時勢使然也。若夫王室中興。群材彙進。固宜破格拔擢。而官尚止小學一教員。既而姓名所聞。徵書始降。則天又遽奪其年。悲夫。先生少仕姬路藩。甫弱冠。就師京阪間。嶄然既見頭角。攝之伊丹有書院。先生應招往為山長。或譖之曰。彼口尚乳臭。而抗顏稱師。遺辱他方。此而不禁。世將謂吾藩無人也。乃召還。命東游入昌平。受業於侗庵劉博士。選為舍長。昌平黌者。四方俊秀之所聚。而仙臺齋藤竹堂。號為巨擘。先生與之齊名。雖詞章或

數奇

山長妥否

數奇

數奇

不及。而該博過焉。藩侯賞其力學。廩餼賜金。將欲有所舉用。或阻之。乃已。嘉永四年。補江戶邸教授。給俸十口。先生既挈家東徙。官冷食貧。乃塵居聚徒。從游者甚多矣。然性耿介。不苟交人。其所往來。不過安積良齊。藤森弘庵。安島帶刀及竹堂輩十數人。特受知於水戶烈公。當此時。歐米諸國遣使來求互市。幕議沸起。和戰分黨。先生東歷奧羽。北入蝦夷。講究海防。踰年而還。會大將軍温恭公薨。無嗣。帶刀等密奉天朝。欲奉烈公之子一橋公以為嗣。既而昭德公從紀藩入立。幕吏捕帶刀等。流斬者數十人。先生初不預知。嫌疑下獄。而無為辨白者。乃檻車送姬路以幽焉。所謂戊午大獄是也。文久三年。遇赦。權補好古堂副督學。旋奉使隣藩。察沿海要害。築礮臺。時國家多故。

先生議不見用。籍默度年。一日有司傳命。增俸二口。曰。褒積勞也。先生益不悅。慶應三年。幕府廢政歸王室。明年。兵庫縣辟先生。司教其學。前此。先生在藩。屢請致仕不許。至是辭職。更申前請於藩。乃削籍降為庶人。居無何。外務省徵先生。藩吏欲阻。不能。於是召先生復籍。給祿米二十五苞。以遣之。先生往至兵庫。遽病歿。嗟乎。生者必死。於先生乎。何悼焉。歐公誌墓之文。往往綽約。有風神。此文為近之。其一日。載筆立石。渠東閣。羽儀聖朝。徒理玉樹於地。中洵可惜而已。先生諱潔。字聖與。號白華。父曰真齋。母高橋氏。先生其第三子。生於文政三年二月六日。終於明治三年三月八日。享年五十一。妻龜井氏。生一女天。無子。養妻弟正盛為嗣。所著有出位問答。藝海紺珠。明

律彙纂。題解史蟬。雪窗夜話。北遊乘。白華十稿甲乙篇。愚不知先生然、聞、他、人、評、亦、如、此、言、先生夙自負才學。色嚴氣峻。甚不諧流俗。是以眾毀囂々。曰迂。曰傲。甚至斥為偽君子。要皆非公論。故織部正堀利賢。好鑑人物。贈先生以愛國微衷四字。則其人可知。余既據狀。又參諸堀氏之言。作文以表墓。々在播州高砂十輪寺。

七月廿八日

中村正直妄批多罪

白華君書懷ノ詩一律ヲ得今茲ニ併セラ記載ス

○書懷

六尺形軀敢計安。抱憂別有肝膽寒。文章原不推房杜。武技何曾問范韓。貧屋三間天地小。醉鄉萬里海山寬。男兒豈沒蓬桑志。誤以儒

名博冷官。

○渡邊清君小傳前號ノ續キ

君既ニ京ニ上リ舊藩主大村純熙公ノ書ヲ薩侯ニ呈ス侯大ヒニ悦ビ君ヲシテ新精組ヲ率井其邸内ニ寓セシム是ヨリ先キ大村少壯ノ有志輩數名名ヲ書生ニ托シ京攝ノ間ニ散在スル者皆來テ君ニ屬セリ十二月九日朝命アリ會桑等ノ宮門ヲ守衛スルヲ止メ更ニ薩土等ノ兵ヲシテ之レニ代ハラシム薩ハ乾門ヲ守リ土ハ日ノ門ノ戍ニ當ル而シテ土兵獨リ至ラズ故ニ君新精組ヲ以テ薩ノ旗章ヲ帶ヒテ之ヲ守レリ明治元年正月三日徳川慶喜會桑ヲ先鋒トナシ將サニ京師ニ入り直チニ

禁闕ヲ犯サントス君又兵隊ヲ薩ノ旗章ヲ帶バシメ薩兵ト共ニ鳥羽ニ出テ之ヲ防禦センコトヲ約シ將ニ兵ヲ發セントス會マ朝命アリ東軍西上スル者今夕將ニ大津ニ至ラントス宜シク兵ヲ出シ以テ其變ニ處スベシト是ニ於テ君始メテ大村藩ノ旗章ヲ掲ケ即夜大津ニ到リシカバ西上ノ東軍ハ其備アルヲ聞キ忽チ路ヲ伊州ニ取り將サニ大阪ニ出ツルヲ企ツト雖モ伊州兵ノ脅ス所ト爲リ遂ニ潰ヘテ東走スルニ至レリ

○香川敬三君ノ小傳

君初メ蓮田了介ト稱シ後チ鯉沼伊織ト改メ名ヲ廣安ト云フ北畠親房ノ後裔ナリ祖父ハ蓮田嘉往父ハ孝定母ハ袖子君ハ

其第三子ナリ出テ鯉沼氏ノ養子トナリ後々又養家ヲ去テ京師ニ上リ今ノ名ニ改ムト云フ安政年間朝廷ノ詔書ヲ水戸前中納言齊昭公ニ下スヤ幕府有司等之レヲ幕府ニ収メント欲ス是ヲ以テ水戸正義ノ主慷慨憤激シテ相謂テ曰ク詔書ハ特ニ水戸ニ賜ハルトコロナリ然ルヲ今之ヲ幕府ニ移シ収メントスルハ勅ニ違フノ甚シキ者ト謂フベシ若シ朝廷ヨリ之ヲ還納スベキノ命アラバ吾輩速カニ之レヲ奉シテ京師ニ上リ直ニ還納セントス何ソ幕府ノ奸吏等ニ納ムルヲ爲サン且ツ幕府有司等モシ強テ之レヲ収メントセバ吾輩當サニ粉骨碎身萬死ヲ犯シテ以テ之ヲ拒絕スベシト衆議一決セリ是ノ時

ニ當リ水戸ニ亦タ奸黨アリ竊カニ幕吏ト交通スルヲ以テ遂ニ兵ヲ擧ケ悉ク正義ノ士ヲ殲滅セント欲スルニ至ル故ニ正義ノ士衆寡敵スル能ハサルヲ謀リ一旦其難ヲ避ケ四方ニ遁竄スルモノ甚タ多シ而シテ君モ亦此時水戸ヲ脱シテ諸國ニ流寓セリ

編者曰ク源烈公齊昭ノ詔書ヲ奉スルヤ天下ノ大勢ヲ觀テ宗家ノ起伏ヲ思ヒ且ツ意ヲ世界ノ形情ニ注キ未タ詔書ノ以テ諸侯伯ニ傳フ可カラサルヲ察シ乃チ之レヲ封函シテ家廟ニ藏メ以テ世ノ動靜ヲ觀ラレタリ安政六年癸未十二月十七日中甸ト云フ井伊大老ヨリ水府家士ノ江戸邸ニ在ルモノニ

令シテ曰ク詔書ハ先ツ幕府へ納メ因テ京師へ還納スベシ
是ニ於テ邸士等議スル所アリ家老白井某ヲ水戸ニ遣ハセ
リ白井某万延元年庚申正月二日ヲ以テ江戸ノ小石川邸ヲ
發ス當時事既ニ水戸ニ聞ユルヲ以テ志士數十名城ヲ距ル
コト二里邑ノ長岡驛ニ出テ白井ヲ要ス到レハ則チ之レヲ
抑止シテ曰ク詔書ノ事老公ト雖トモ之レヲ動カサス當君
モ亦タ之レヲ動カサ、ルハ蓋タシ深意ノアルナリ抑モ邦
國ヲ安ンシ宗家ヲ保チ威武ヲ世界ニ輝カスハ當家其ノ任
ニ當ル况ヤ此ノ詔書アルニ於テヲヤ而シテ今其時ニ非ス
故ニ輕々シク之レヲ動カサ、ルナリ然ルヲ井伊等輕々シ

ク之レヲ動カサント欲シ子モ亦タ輕々シク之ヲ諾ス我二
公ノ意ニ非ス又詔書ヲ輕ンスルナリ吾輩志士爰ニ子ヲ迎
フハ是カ爲メナリ白井強テ境ニ入ラントス志士コレヲ遮
リ力闘セリ故ニ白井主僕疵ヲ蒙ムルニ至リ終ニ言ヲ改メ
テ云ク詔書ノ事コレヲ衆ト議セントス敢テ争ヒコレヲ取
ラントスルニ非スト因テ遂ニ其境ニ入ルコトヲ得タリ是
ヨリシテ井伊等ハ堅ク之レヲ求メ志士等ハ固ク之レヲ拒
ミ一藩驍然トシテ志士逃脫スルモノ甚多ク隣境皆警戒ス
ルニ至レリ

万延元年庚申八月徳川源烈公薨スルニ會ス志士等痛歎シテ

止マス相ヒ議シテ曰ク宜シク忠良ノ主ヲ得テ先君ノ遺志ヲ
達ス可シ聞ク島津修理大夫厚ク 天皇ノ勅ヲ奉スト速ニ
之ニ依テ事ヲ謀ラン遂ニ君等三十七名江戸ノ薩邸ニ投シ其
志ヲ陳ス居ルコト一年餘幕府又タ命ヲ下シ君等ヲ本藩ニ還
シ駒込ノ邸内ニ檻囚ス文久二年壬戌四方勤王ノ士驟カニ起
リ天下ノ形勢一變ス此ニ暨ンテ勅アリ曰ク戊午以來國事ヲ
以テ幽囚ニアルモノ一切放免ス可シト是ニ於テ君亦再ヒ天
日ヲ觀ルコトヲ得タリ

三年癸亥二月水戸中納言慶徳公上洛ス君コレニ從テ上京シ
幾ハクモナク江戸ニ歸ル又徳川民部大輔公ニ隨テ上京ス元

治慶應ノ間幕府有司等正義ノ士ノ己レニ便ナラサルヲ惡ク
ミ忠良ヲ斬害シ頗ル暴政ヲ極ハム松平容保京師ノ所司代々
リ亦幕吏ト合同シ暴威最モ甚タシ元治元年甲子七月長門人
之ヲ憤リ容保ヲ京師ニ伐ツテ克タス竟ニ毛利宰相父子朝敵
ノ名ヲ蒙ルニ至ル慶應乙丑丙寅ノ歲幕府兵ヲ毛利宰相ニ加
フ而シテ縉紳ノ己レニ便ナラサル者ヲ幽閉シ勤王ノ士ヲ搜
捕シ之レヲ斬害ス慘毒到ラサル所ナシ王室孤立シ諸大臣ト
雖モ或ハ竊カニ幕府ノ鼻息ヲ伺フノ狀アリ慷慨ノ士切齒シ
テ相謂テ曰ク徳川氏掌握ノ權ヲ解キ以テ王室ニ歸セシムル
ニ非スンハ臣子ノ分ニ於テ死ストモ休マス此語一タヒ出ル

ヤ朝野靡然トシテ此議ニ應セサルモノナシ君亦此議ヲ善トシ東奔西走シテ正議ヲ賛成ス松尾非藏人相承アリ君ニ謂テ曰ク縉紳ノ中ニ於テ憂國ノ志最モ深キハ岩倉具視公ナリ壬戌ノ年嫌疑ニ因テ洛北岩倉村ニ蟄居ス子往テ志ヲ陳スヘシト君直チニ往テ謁見ス果シテ恢復ノ策其助ケヲ得ル少シトセズ復思惟スラク鎮西ニ三條公アリ京師ニ岩倉公アリ二公協力セハ國家ノ大計爲ス可キナリト之レヲ大橋愼ニ謀ル愼ハ土州ノ人舊名橋本鐵猪ト云フ嘗テ國ヲ脱シテ四方ニ奔走シ王事ニ勤ム君ノ此語アルヲ聞テ大ニ喜ヒ共俱ニ岩倉公ニ謁ス (以下嗣號)

○孝女森藤婦由の記事

岡山縣下美作國勝北郡瀧本村の農森藤新四郎の姉婦由ハ篤き孝行ものよて兩親と大切よいたし又弟をも友愛の道と以て深く憐れみ家ハ素より赤貧の事なれハ何事も思ふまゝよからぬ折柄唯々一家睦しく稼きて暮し居たりしか不仕合と其母親病ニ罹り十年の久しき病牀ニありけれと婦由ハ聊か厭ふ氣色もななく能く介抱し又少しの餘暇あるときハ弟の農業等を手助け杯して稼く一方ニ日を送れりかくて婦由ハ嫁入の年とるるゆゑ此地彼所より貰はれ親類達も色々と説き勸むれと一向聽き入れずして種々奉養看護ありしか

間ふかく母ハ遂ニ黄泉の客と成り婦由の愁傷一方ならず形
容の瘦せ衰ふる程ニ及べり其後父親も亦た病氣ニ罹り不如
意なれハ婦由ハ又々十分の看病をつくし始終一つの如くあ
りけるよより昨年元北條縣より官へ伺ひありて賞譽の典と
行ひ旌表せられり世の聞く人々ハ何れも涙を流し感歎
せざるものなく同縣官吏數名よりも文章を作り金若干圓と
添へて賞與をせしむ

第二十五號正誤 三葉裏第四行 (越前寺)ハ(越前守)ノ誤
七葉表第三行 (然り而シテ)ハ(然而)ノ誤

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一
割五分引○六十冊以上ハ二割引

右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸
事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼
編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目

博聞社

本局

加賀國金澤町

益知館

所	棚	賣
西京古門前三吉町		博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南入		全分社
千葉縣下寒川		全分社
埼玉縣下浦和驛		全分社
東京常磐橋前		全支店
加賀國金澤上堤町		中村喜平
同	安江町	近田太平
同	堤町	野島信吉



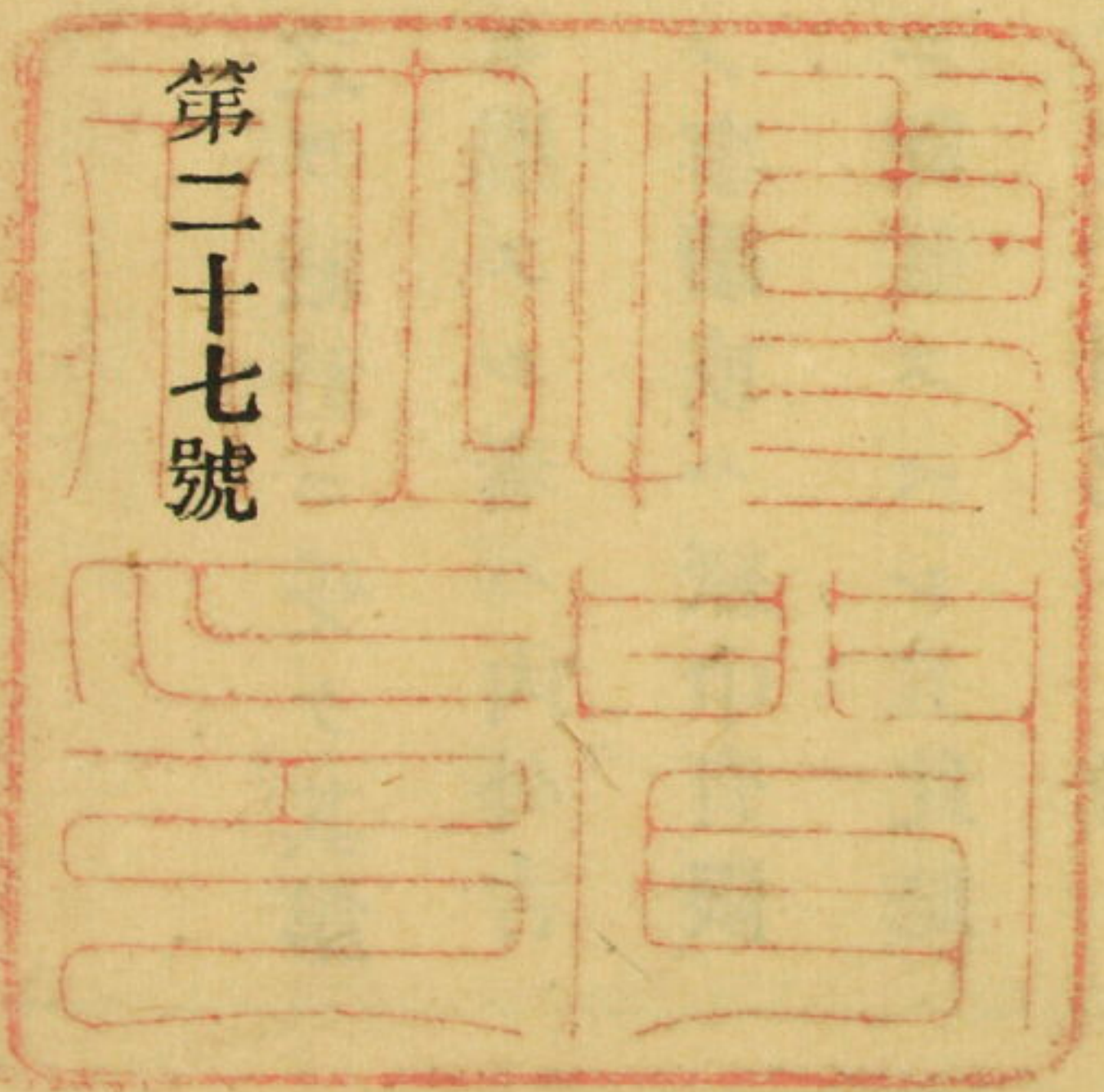
明治十年一月三十日發兌

香川敬三君小傳前號ノ續キ

義僕相蘇武藏ノ記事

孝子石黒兵吉ノ記事

名譽新誌



緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第
廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古
今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限
ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌
ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ
希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ
識リ勸懲ノ一端タラシヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニノ報告ヲ賜
ハ、幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十七號

○香川敬三君小傳前號ノ續キ

又石川誠之助アリ舊名中岡信太郎ト云フ土州ノ脫士ナリ初
メ慎ト共ニ長州ニアリ三條公ノ鎮西ニ赴カル、ヤ誠之助隨
テ行ク爾來潛カニ京師ニ往來シ時事ノ變動ヲ察ス故ニ慎コ
レニ告クルニ岩倉公ノ事ヲ以ス誠之助乃チ慎ト共ニ公ニ謁
シコレヨリ屢々薩長京師ノ間ニ往復シ大ニ爲スコトアリ坂
本龍馬モ來リ會ス亦土州ノ人ナリ誠之助ト共ニ王事ニ勤ム
慶應三年丁卯幕府長州ヲ伐テ克タズ天下物議洵々タリ將軍
慶喜公大政ノ維持スベカラサルヲ知り政權ヲ還納センコト

ヲ請フ時ニ當路ノ大臣速カニ其政權ヲ収ムルコト能ハズ躊躇シテ久シキニ彌ル是時中山忠能公正親町三條實愛公中御門經之公岩倉具視公等勅ヲ奉シテ命ヲ薩長越尾土藝ノ諸藩ニ傳ヘ幕府ノ政權ヲ収メントス斯時侍從鷲尾隆聚公勤王ノ士ヲ率井兵ヲ大和紀伊ノ間ニ屯シ以テ緩急ニ備フ君等感激シ其募リニ應シ大橋慎田中光顯藤村紫朗岩村高俊片岡利和芳野親義前田雅樂沖垣齋三宮義胤等其他數百人ト共ニ即夜京師ヲ發シ十二日紀州高野山ニ到リ十津川ノ士及ヒ近隣ノ志士ヲ招募スルニ來リ應スルモノ千餘人ニ及ヘリ明治元年戊辰正月三日徳川慶喜松平容保等反スルニ及ヒ朝廷錦旗ヲ

其軍ニ賜フ此ニ於テ全軍高野山ヲ下リ大和ニ到リ五條ノ陣屋ヲ収ム又紀見嶺ニ賊アルヲ聞キ軍ヲ轉シテ之ヲ討チ進ンデ大坂ニ到ル時ニ慶喜ノ先鋒既ニ伏水ニ在リ連戦利アラズ大敗シテ竟ニ大坂城ヲ退去シタリ而シテ君等軍ヲ旋シ京師ニ到ル則チ軍議東征ニ一決セリ

正月二十一日東山道先鋒總督岩倉具定公副總督岩倉具經公京師ヲ發ス君其軍ニ從テ東下ス總督府ノ軍武州板橋驛ニ到リ屯ス是ヨリ先キ松平容保上國ノ戦ニ敗レ走テ會津ニ歸リ益々逆意ヲ逞フシ兵ヲ野州日光山ニ出シ其近傍ヲ劫掠ス宇津宮ノ城主戸田越前守其家士縣勇記ヲ遣ハシ板橋驛總督府

ノ營ニ來リ急ヲ報セシヲ以テ總督府ヨリ彦根。岩村田。須坂ノ
三藩及ヒ岡田某等ニ命シ兵二百ヲ發シ往テ之ヲ救ハシム四
月朔日總督府命アリ君ヲ軍監ニ任ス君平川和太郎祖式金八
郎ト共ニ朝命ヲ奉シテ即日板橋驛ヲ發シ行テ粕壁驛ニ次ル
此夜急報アリ云フ賊軍下總流山驛ニ在リ官軍ノ後ヲ襲ハン
トスト三日君等粕壁驛ヲ發シ賊軍ヲ流山ニ襲フ賊徒戰フ
能ハス賊長近藤勇出テ降ヲ乞フ之ヲ曳テ越ケ谷驛ニ到リ明
日總督府ニ致シ遂ニ其首ヲ斬テ京師ニ送リ三條河原ニ梟示
ス勇ハ往年新撰組ノ長ヲ以テ京師ニ在リ暴威ヲ恣ニシ多ク
正義ノ士ヲ殘害シ奸惡ノ罪許スベカラサルモノナリ故ニ之

レニ及フト云フ四日祖式金八郎ハ須坂藩ノ兵ト共ニ下總結
城ノ城ヲ陷ル初メ城主水野日向江戸ニ在テ私カニ賊ト通ス
其家士ノ結城城ニ在ルモノハ皆官軍ニ從ハント欲ス日向切
ニ之ヲ疾ミ上野山内ニ嘯集スル賊軍ノ彰義隊ヲ分テ之ヲ率
井來テ城ニ入り正義ノ家士ヲ暴殺シ遂ニ其城ニ據テ官軍ニ
抗ス故ニ之ヲ誅討セリ八日君等宇都宮ニ到ル賊徒ノ日光山
ニ屯集スルヲ聞キ直チニ軍ヲ率井テ之レニ向ヒケレバ板倉
伊賀父子出テ降ヲ乞フ由テ之ヲ戸田越前守ニ預ケ十一日君
等宇都宮ニ還ル時ニ賊徒總野兩州ノ間ニ横行シテ官軍ニ抗
ス賊ノ一軍將サニ宇都宮ニ逼ラントス君等コレト野州小山

驛ニ戰フ十七日官軍退テ宇都宮城ニ據リ急ヲ總督府ニ告ケ
援ヲ乞フ此時祖式金八郎上田楠次ハ尙ホ結城ニ止マリ有馬
藤太ハ總督府ニ行キ城ハ只タ君ト平川和太郎ト二人ノミコ
レヲ防守セリ十九日賊兵大ニ城ニ逼リ火ヲ城下ニ放チ四面
圍ミ攻ム是日早晨ヨリ日晡ニ迫フマテ官軍休セスノ奮闘シ
賊兵亦頗ル攻撃シ殺傷相當リ城マサニ陷ントス君衆ニ謂テ
曰ク事此ニ及フ余輩衆ト共ニ一死之ヲ守ル可シ衆曰ク板橋
ノ援兵將サニ到ラントス一タヒ城ヲ出テ、コレト合セン我
今城ヲ出テハ賊必ス城ニ入ラン入レハ則チ唾手シテ賊ヲ城
中ニ鑿殺スヘシ是レ我活路ニ就キ以テ賊ヲ死地ニ入ル、ノ

策ナリ今賊ハ客戰ニシテ聚散離合ノ自由ヲ得タリ我ハ孤守
シテ四面ニ敵ヲ受ク若シ援兵ノ到ルヲ遲ケレハ我ハ首ヲ延
ヘテ賊ノ刀ヲ待ツノミ然レモ是レ策ノ宜シキ者ニ非ス宜ク
期ヲ弛メテ再舉ヲ圖ルヘシト衆議一決シ總軍一團トナリ叱
咤シテ城ヲ出ツ賊兵當ルヲ能ハス竟ニ圍ミヲ衝テ去レリ此
夜燒亡シ賊コレニ據ル既ニノ薩長土因及ヒ大垣等兵ヲ整ヘ
テ到ル君等之ト兵ヲ合シテ城ヲ攻ムレバ城輒チ復ス君等又
タ彦根ノ兵ヲ引テ野州鹿沼城ヲ守ル時ニ總督府板橋驛ヲ發
シ武州忍城ニ入ル君等往テ之レニ屬ス又進テ上州館林城ニ
入ル總督ノ江戸ニ入ルニ及ンテ君亦タ之レニ隨フ時ニ戊辰

ノ年五月ナリ徳川ノ臣隸彰義隊ト稱スルモノ諸方ノ脱走輩ト共ニ上野寛永寺ニ屯集シ輪王寺宮能久親王ヲ擁シ屢々官兵ヲ暴殺シ兇逆ヲ逞フス時ニ官軍ノ江戸ニ在ルモノ亦甚タ寡シ君總督府ノ命ヲ以テ程ヲ兼テ京師ニ上リ岩倉輔相ニ因テ援軍ヲ促カス此行君京師軍務官ニ於テ褒賞ヲ蒙リタリ其詞ニ曰多年勤王之志厚ク種々艱難候段神妙之至被聞召依之軍曹へ被召加候猶王政御一新之御主旨ヲ奉戴シ誠忠可致候事又曰ク其方事身柄一代拾人扶持被宛行者也以上二通ヲ下賜セラレシハ明治元年戊辰五月ナリ同年七月軍務官權判事試補ヲ拜命シ即日大總督府ニ出仕シ軍務ニ從事ス九月鎮將

府ヨリ本職ヲ以テ鎮將府軍務局ニ勤仕スヘキヲ命セララル同月二十五日同府ニ於テ軍務局權判事トナリ十一月廿五日太政官ニ於テ東北諸藩賞罰取調ノ命アリ君大村永敏ト共ニ之レニ從事ス同月小御所ニ於テ天顏ヲ拜シ春來ノ功ヲ賞セラレ御太刀料金百五拾圓ヲ賜ハル十二月朔日軍務官判事ヲ拜命シ同月從五位ニ叙セララル明治二年己巳二月十九日太政官ヨリ命アリ上京シ六月行政官ヨリ軍功ニ依テ永世祿三百石ヲ下賜セララル八月二十三日函館軍功賞典取調掛トナリ半途病ニ罹リ之ヲ辭ス三年庚午正月病ニ依テ其職ヲ辭ス即日東京在留ノ命アリ三月軍曹ノ稱廢セラレ東京府貫屬士族ト

ナル九月當分制度局へ出仕スヘキヲ命セラル十一月宮内權
大亟兼内舍人長ヲ拜命ス同月太政官ヨリ命アリ上京ス辛未
二月制度局御用掛ヲ兼勤ス八月職制御改革ニテ宮内少亟ト
ナル十月洋行ノ願ヲ以テ其職ヲ辭ス五年正月亞米利加華盛
頓ニ於テ宮内省理事官隨行ノ心得ヲ以テ御用筋取調ノ命ア
リ二月三十日歸朝ス六年三月宮内省六等出仕ニ補セラル五
月四日午前第一時皇城回祿ニ罹ル時ニ君宮中ニ宿直ス女官
菊命婦告テ曰ク後宮火ヲ失スト君直ニ御前ニ俯シ火ヲ避ケ
玉ハンコヲ奏上ス 主上皇后宮ト三神器ヲ奉シ出御ス君又
宮中ニ入り御物ヲ持シ出ツ滿宮火トナルニ及テ 主上皇后

宮ニ扈從シ吹上ノ瀧見離宮ニ至ル同月十二日宮内少丞ニ任
セラル七月二十二日名廣安ヲ改メ敬三ト稱スト云フ

○義僕相蘇武藏の記事

山形縣下酒田米屋町相蘇武藏〔五十年〕ハ飽海郡南吉田村相
蘇清太郎の弟にて安政二年酒田の池田惠三郎と云ふもの、
雇人となりしニ性質貞實廉直として其家長ニ仕ふるニ忠誠
至らざるハなし今を距る十四年以前一ケ年の中ふ惠三郎夫
妻並妹及ひ長男共打ちつゞき病死して唯く残りしものハ
惠三郎の伯母一人となりしかバ武藏ハ愁傷悲歎して已まず
其伯母も杖柱とも思ふ惠三郎の死せしを見て愁傷の餘り又

病氣に罹りしことあり武藏ハ四人の病中看護葬祭と聊か倦怠なく心を盡くして取扱ひければ近隣誰獨り感賞せ忍んものばかりしとぞ其後ち残りし伯母へ惠藏と云ふ者を聳え貫ひ又二木文次郎を嗣子となし惠三郎の家名を相續させしに文次郎ハ放蕩無頼のものなれば間もなく實家へ歸し惠藏ハ獨り手仕事杯して聊かの賃金を取り居たりけれど斯る重ぬくの不仕合打繼ぎ貧苦身に逼りて最早武藏を遣るべき給金もなき程なれば惠藏も余儀なく武藏に暇を遣りしと武藏ハ倦々其家と去るに忍びず只管資財を補助し餘暇とハ山野と馳け廻り薪等を拾ひ集え杯して色々取續の事のみを骨

折しかバ親戚懇意の者ハ他へ養子たらんととを勧め或ハ妻を迎へて俱に家長を助くべしと勸むるものあり武藏曰く我れ此家と去らば誰れか兩人を保護するものあらん若し又よから忍妻を迎へば家長の爲めよからずとて聽き入れざりしが明治六年惠藏夫婦も亦病氣づき殊に惠藏ハ上氣の症にて病勢も追々募りしより據どころなく一室に錮し武藏ハ晝夜の差別なく怠らず看護せり雪中返寒の節ハ惠藏を其室より出し終夜自分の身体を以て温め杯して介抱せしが惠藏ハ明治七年十一月に死去し妻も同五月に病死せり武藏ハ又一人として兩人の看護葬祭より朝夕の薪炊食物醫藥を始め自身の

才覺さいかくよて家長の資財しざいを調達てうたうせし等の懇篤こんとく至誠しせいあること筆紙ふでかみよ盡し難し斯く一家死絶いつかしぜつの不仕合ふしあひに至りしことより末家むちけ鶴岡居住池田惟明を以て家を繼つがしめ該家些末さまうの器物きぶつに至るまで一も紛失なく引渡し向後ハ家長の家も本へ立ち直るならんとて年寄心よ一と安心して明治七年武藏ハ四十九歳となりしが始て妻を娶り猶惟明が家を見繼ぎ居て始終しじう變かはらざること二十一年の久き一日の如くありしとぞ舊酒田縣廳より一昨年官へ伺ひの上褒賞として金二圓五十錢を賜たまはれしと云ふ

○孝子石黒兵吉の記事

愛知縣下三河國寶飯郡御馬村の農石黒兵次郎の養父石黒兵

吉(六十一年五ヶ月)ハ出生後程ほむなく實母よ死去され其父兵吉ハ同郡金尾村中尾次右衛門の四女美左なるものを乳母うよ雇ひて其子兵吉を養育やういくさせけれバ美左の性質せいしやう心立たてハいと宜しくして殊ちゆうよ乳兒ちのみこを慈愛じあいせしことハ一と方ならず兵吉も實母の如く懐なつきたるこより終はつ美左を後妻ごさいよ直ただし男子二人出生せしよ父兵吉ハ天保七年よ病死せり倅兵吉(幼名兵次郎)ハ性質温厚おんかう篤實とくじつよして曾て繼母の慈愛じあい深く養育の厚あつきに感かんじ反はん哺ほの孝に油斷なく繼母よ事へて孝順こうじゆん至らざるなし人の妻を勸すすむるものあれハ兵吉云く日稼ひかせぎの暮し貧苦の中に妻を迎へてハ孝養かうやうも行届かずとて今日よ到るまで妻もなくして暮し

居たり前方他家へ遣つかわしたる繼母の所生弟勝之助の長男なる兵次郎を家に迎へ家名を相續ついでとして兵吉にハ只管孝養のみふ從事し隣里りんりの招請祝膳等せうせいしゆくぜんの席に臨む毎ふ厚味かみあれば必ず持歸りて母に與へ且つ其節の始末はつまつを懇ねんせうに物語りして其心こころを慰なぐさめ老を忘わすれしめけるにより比隣ひりん舉て感賞せざるハあし最早繼母美左ハ本年八十八歳にて兵吉ハ六十一歳となりて何れも古稀こき前後の老人なれども親子共ニ壯健さうけんよて日を送れり今ニ兵吉ハ少しの荷商にあきなひ杯し其日の活計くわつけいを手助けして母子兩人の心を慰め家内一同睦しくありしかバ一昨年官より褒賞金二圓を賜ハれしと云ふ

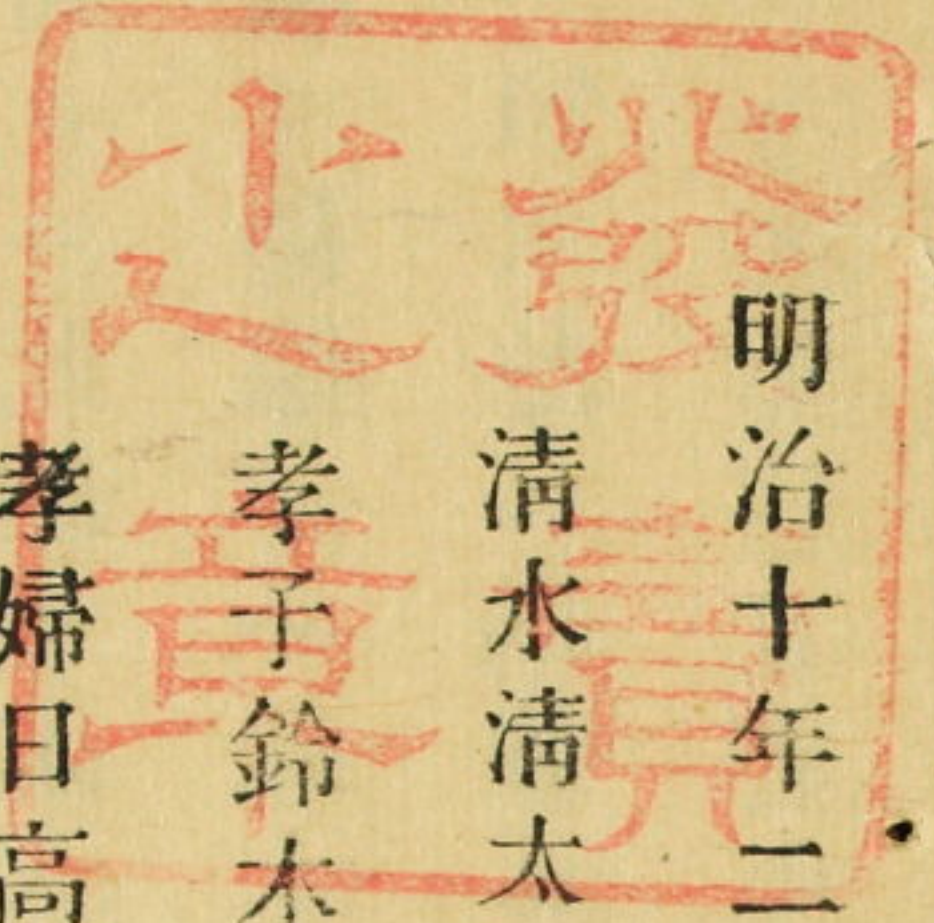
一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一割五分引○六十冊以上ハ二割引
右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景弼
編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目
本局 加賀國金澤町 博聞社
益知館

賣 捌 所

西京古門前三吉町	博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南 ^三 入	全分社
千葉縣下寒川	全分社
埼玉縣下浦和驛	全分社
東京常磐橋前	全支店
加賀國金澤上堤町	中村喜平
同 安江町	近田太平
同 堤町	野島信吉



明治十年二月十四日發兌

清水清太郎ノ傳附詩歌

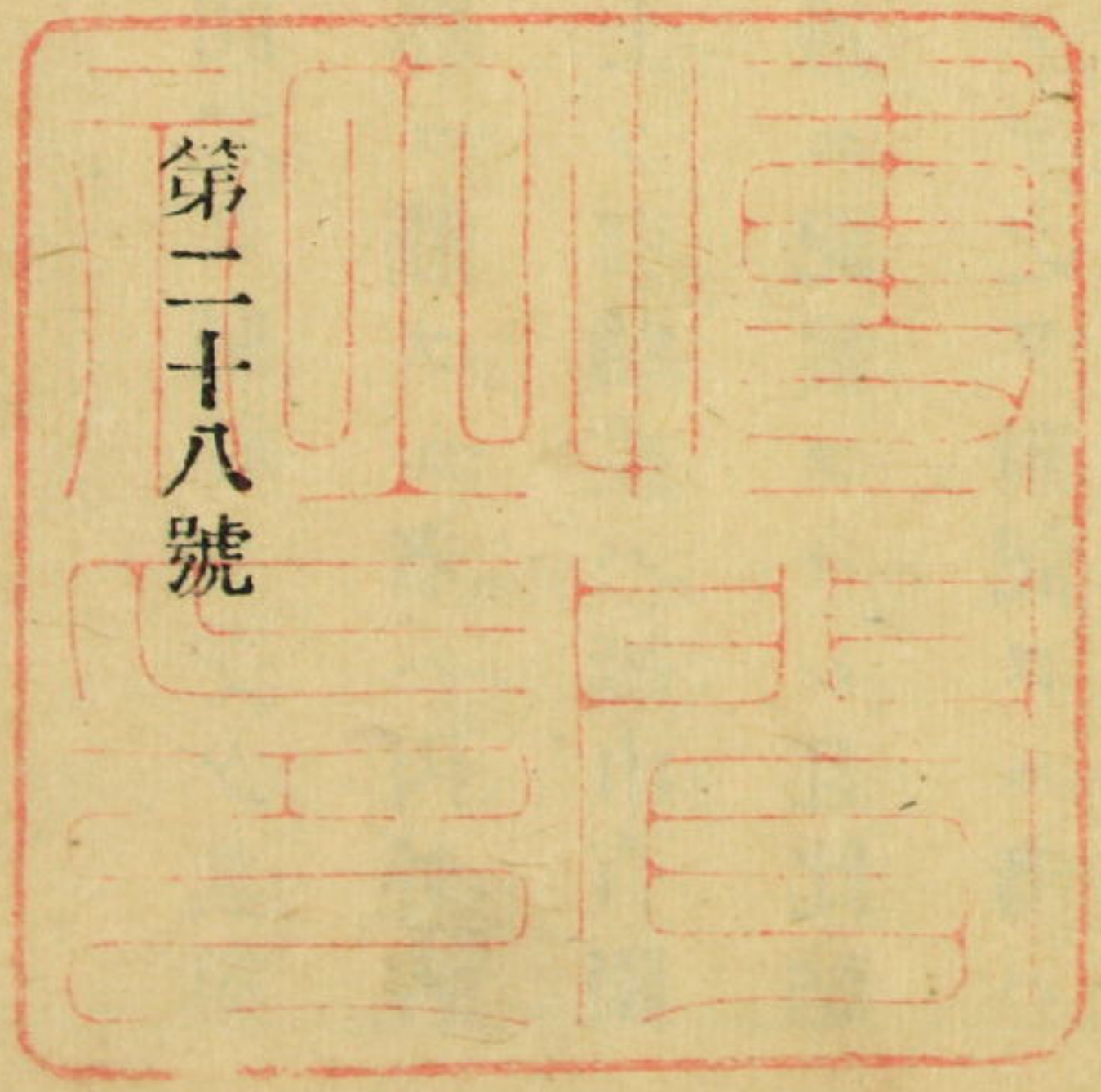
孝子鈴木儀平ノ記事

孝婦日高加與ノ記事

益井元右衛門ノ美談

貞婦三代川松ノ記事

名譽新誌



第二十八號

緒言

本誌ハ曩キニ大來社ニテ發行ノ處這回之ヲ敝社ニ受ケ其第
廿號以下ヲ嗣出ス編輯ノ體事苟モ名譽ニ屬スル者ハ内外古
今ノ別ナク併テ之ヲ登録シ其高人偉士ノ事蹟或ハ紙中有限
ノ紙幅ニ盡ス可カラザル者ハ別ニ附録ニ記載スベシ且此誌
ト相反シ名譽ヲ汚損スル事蹟ヲモ収メテ之ヲ附記スル者ハ
希クハ此誌ヲ讀ム人妍媸自ラ見レ益々名譽ノ貴重スヘキヲ
識リ勸懲ノ一端タラシヲ

但本誌ニ掲載ス可キ事項有ラバ其事實ヲ詳ニノ報告ヲ賜
ハ、幸甚且書中事實ヲ失フ者ハ速ニ正誤スベシ

名譽新誌第二十八號

○清水清太郎ノ傳

清水清太郎姓ハ平名ハ親知初ノ名ハ知周字ハ子濟葭堂ト號
ス其十世ノ祖ヲ長左衛門宗治ト云フ備中高松ノ城主ナリ天
正十年ノ役節ニ死セリ後毛利氏ニ仕フ親治ハ宗治ノ庶兄月
清ノ後清水圖書ノ長子ナリ幼ニシテ穎敏好テ書ヲ讀ミ舉動
屹トメ成人ノ如シ年甫メテ十三宗家美作ノ嗣トナル亞國ノ
船艦始メテ浦賀ニ來ルヤ和戰ノ議久シク決セス天下騷然物
議恟々タリ親知名門ノ子ナルヲ以テ藩主深ク意ヲ属シ屢從
ヘテ江戸ニ往ケリ親知十四歳ノ時不蹈死地不成善士ノ語ヲ

書シ以テ自ラ警メト爲ス蓋シ他日ノ志旣ニ此ニ成ト云フ可
シ後旨ヲ承テ大橋順藏ノ門ニ入ル墾至テ狹隘居ルヘカラス
乃チ二三ノ生徒ト計リ一老奴ノ家ヲ僦テ共ニ居ル家徒タ四
壁ニシテ又タ井無シ故ニ雨露ヲ取り以テ用ニ供セリ雨降ラ
サルヲ數日ナレハ飲ム殆ント支ヘサルニ至ル時アリテ風雨
俄ニ至リ屋漏四方ヨリ下ル人皆之ヲ厭フモ親知ハ獨リ晏然
トシテ其下ニ朗誦シ一モ以テ意ト爲サス如是ヲ十數月少シ
モ倦マサルナリ順藏罪ヲ幕府ニ獲ルニ及テ藩主親知ニ命シ
テ國ニ歸ラシム未タ幾ハクナラスシテ又世子ニ從テ關左ニ
行キ又京師ニ上リ藩邸ニ居レリ後チ世子ニ從テ嵯峨天龍寺

ニ徙リ常ニ其左右ニ侍シ時務ノ策ヲ獻言ス英艦ノ將ニ攝海
ニ來ラントスルヤ會マ 朝廷毛利家ニ勅メ兵庫ノ戍ヲ督セ
シム世子乃チ親知ヲ留テ學習院内ニ出入セシメ且ツ國老ノ
職ヲ攝セシム旣ニシテ行幸ノ大義アリ親知世子ニ從ヒ蹕ニ
扈セリ尋テ 天使ノ攝海ヲ巡撫スルヤ親知又從ヘリ文久三
年癸亥ノ秋藩主親知ヲ召還シ擢ンテ、參政トナス時ニ益田
右衛門介親施右族ナルヲ以テ最モ威望アリ福原越後元佃國
司信濃親相皆一時ノ選ナリ其他故老亦多シ親知青衿ノ書生
ヨリ起リ其間ニ豫參シ頗ル忠直ノ稱アリ毛利氏禁門ノ警衛
ヲ罷メラレシヨリ禍結テ解ケス親知出テ、因幡及ヒ備前ニ

使ス蓋シ 朝家ノ爲ニ謀ル有テ然ルナリ是ヨリ先キ山陰道
ノ者訛言ス長州ハ因州ト合力シテ將ニ兵ヲ出シ雲州ヲ挾擊
セントスト親知石州ニ入ルトキ從者僅ニ三十許人ナリ而ル
ニ雲州石州大ニ震動ス幕吏等恐テ親知ヲ郷津ノ驛ニ要ス親
知乃チ其土人ヲ召シ天下ノ形勢ヲ執リ懇々諭スニ大義ヲ以
テス土人感泣シテ曰ク豈敢テ力ヲ致サ、ランヤト爲メニ幕
吏ニ説キ沿道箒ヲ執テ前驅ヲ爲シ因州ヨリ備前ニ入ル此時
太平山ニ屯セル義徒等書面ヲ備前侯ニ上リ攘夷ノ先鋒ヲ爲
シコヲ奏請ス親知乃チ爲メニ説テ曰ク夫レ 公ハ 天朝ノ
大藩ニ位シ身ハ幕府ノ懿親ナリ天下ノ人皆謂ラク 公宜シ

ク天下ノ重ヲ以テ任シ玉フヘシト今ノ時ニ於テ誠ニヨク自
ラ闕下ニ詣リ親シク 明詔ヲ奉シ身ヲ以テ幕府ヲ匡輔シ玉
ハスンハ則チ特ニ義徒ノ志ヲ伸ルコト能ハサルノミナラス天
下ノ大亂是ニ由テ生セン然ルキハ 公ソレ何ヲ以テ 天子
ニ奉シ何ヲ以テ 天子ニ謝センヤ願クハ是ヲ熟圖シ玉ヘト
然レモ事遽カニ行ハレサルヲ以テ遂ニ去レリ歸途備中ノ高
松ヲ經ルキ父老往々迎ヒ拜シ相謂テ曰ク清水氏後胤アリ遺
憾ナシト涙ヲ流ス者アリ元治甲子夏秋ノ際防長ノ士衆藩主
父子ノ冤ヲ訴ヘテ都下ニ出ツ事遂ニ敗レ國難益甚シ親知麻
田公輔ト共ニ馳テ岩國ニ抵リ計畫スル所アリ既ニメ黨議作

リ怨讟ヲ逞シ親施元個親相等皆坐シテ罪ヲ得徳山ニ幽セラ
ル而ノ公輔モ又疏ヲ上テ自殺ス諸老多ク危疑セリ親知書ヲ
上リ自ラ咎ヲ引キ罪ヲ采邑ニ待ツ尋テ職ヲ褫ハレ父ノ許ニ
幽セラレ後チ菽城ニ移ル親知將ニ發セントス故舊交諫テ曰
ク往ク勿レ君必ス免レサルナリ是決シテ公ノ意ニ出ルニ非
ス今國家危急君ヲ捨テ、亦誰カ公ヲ輔クル者アラシヤ親知
泣テ曰ク親知ハ既ニ罪臣ナリ今死スルモ己ニ晚シ吾唯自カ
ラ欺カサルヲ知ルノミ其他ハ知ラサルナリト遂ニ往ク居ル
ト一月其家ニ死ス親知將ニ死ニ就ントスルトキ沐浴ノ淨衣
ヲ着ケ古道照顔色ノ五大字ヲ書シ東ニ嚮ヒ拜スルト再ヒ又

タ公ノ居ニ嚮ヒ拜スルト再ヒ從容自若トシテ劍ヲ按シ其弟
及ヒ左右ヲ顧テ曰ク天或ハ江家ニ祚セサルト有シニ其時死
ヲ以テ報スルト能ハスンハ則チ清太郎ノ弟ニ非ルナリ清太
郎ノ臣ニ非ルナリト其腹ヲ屠テ死セリ時ニ元治甲子十二月
二十五日年二十二親知沈黙ニシテ剛毅其言貌虔誠人ヲ動ス
ニ足ル常ニ曰ク人或ハ知ラサルモ豈自ラ心ニ愧チサランヤ
ト好シテ士ヲ延キ其家ニ留寓セシムル終歲絶ヘス一時名ヲ
知ラル、者亦多ク其門下ニ出ツト云フ著ス所ノ詩文集若干
卷アリ今左ニ一二首ヲ擧ク

○壬戌西歸

三年爲客倦遊還何事居諸瞬息間眩眼錦衣非素志依然頑骨入
家山

さらてちよいと、淋しき夕暮の音さへ忍ぶ春雨の空
世のとい絶て小くらき山里の心盡しの夜半の燈し火

○孝子鈴木儀平の記事

愛知縣下三河國設樂郡田代村の農人鈴木儀平(四十六年二月)と云ふものありその父伊之助(七十有餘歳)ハ安政四年の春頃より中風の症よて半身偏枯晝夜病褥を離れず終り手足も不自由となり隨て藥資も尠からず加ふる儀平ハ二子を儲けて妻を亡ひ又後妻を迎へ今ハ家内五人暮しよて元來微薄の

農かれバ別な生活の手段もなく傍ら山稼きをして薪炭等を背負ひ賣り僅に一家取續きし程のこととなりしも聊さか怠慢なく親父の長病氣を看護し平常稼きよ出るときハ必ず病床に就きてその容体を尋ね又歸宅の時ハ其日のなせしことを一々細かに話し親父の心を安堵せしめたり斯くて終日の山稼きに身体も勞疲すれど少しの厭ひなく藥餌給事等其好み通りとして父の心の違背せず加之衣類の汚穢あるも其妻よ打任せす必ず自分に洗濯して清潔にし孝養せしことを最早二十年の久きかりしとそ又長男徳吉(十四歳)を同區門谷村の學校へ通學させて貧苦の中より學資を工夫し子を訓ゆるの

道にも能く心を盡せしより一昨年金二圓を官より賞賜されたり

○孝婦日高加與の記事

宮崎縣下那珂郡城ヶ崎町に住居せし日高幾次郎の家貧窶にして子一人もなく生平船乘を家業とし各處の海を乘廻り稼き居りしより自然家も留守勝のことなれは其妻加與は始終夫を代りて姑(名は幾武)に孝養を盡し居たりしか適く弘化二年乙巳の秋幾次郎淡州鳴戸口にて荒き颶風に出遇ひその乗りし船も覆没して遂に魚腹に葬られしとの音信家まで到りければ姑婦は何れも愁歎して止まざりしとぞ斯く夫も死

し女暮して益々貧困に逼りけしと加與は益々貞節を守りて唯々一心に姑を奉事し日夜其憂めを慰さめ又自身もハ備役紡績杯して充分の難義を嘗めしこと三十餘年の久きよ及びひたりしより曾て舊飢肥藩より度々物を賜はりて其篤實孝行を褒美されしと云ふその姑の年ハ九十餘歳になりけるも身体ハ健康にして今猶紡績の業に堪ゆれど如何とせん最早高年のことなれば歩行も素より不如意なるゆへ其行んと思ふ所へハ加與が背負て行き姑の意も戻りしことハ少なきかりけり殊に貧苦の活計にて前途も覺束なくありけるも姑の好む魚肉茶菓等の物ハ廣く買ひ集め充分と

名譽新誌 第二十八卷
供給して暮らし居たりけれハ昨年官より五圓金の褒賞かありしとそ

○益井元右衛門の美談

京都府下愛宕郡西紫竹大門村の益井元右衛門(年七十有餘)ハ舊穢多ふて性質篤實ニ心掛けもいと宜しく元穢多村蓮臺野一郭の年寄役を四十餘年の間勤續きて御一新の際更ニ戸長と撰擧せられたり元來穢多ハ一種の陋習ありて貪吝残酷の者多かりしと元右衛門ハ深く心と慨歎し村内取締引立方等懇切と力を盡し極難澁の者ハ衣類等を與へ米價騰貴せし時ハ米錢杯を賑はしとかのみならず行狀宜き者ハ二三貫

文の賞錢を給與し心得惡しき者又ハ年少き輩ハ懇と説諭教導せしより小前の者を更ニ感激して無賴の徒も改心する者多くありしとそ又明治三年の頃自分持畑へ新ちニ學校を取り設け書籍其外三百餘圓の入費を出し又自費にて教師を雇入れ其子茂兵衛も教諭の世話とさせ居たりしか明治四年穢多非人の稱を廢せられ一般平民籍ニ編入するの御沙汰ありしより元右衛門ハ一層感激涕泣して村内の者等へ朝恩の有りかたきを諭し常ニ舊染を一洗し國恩を報せんことを説き勧め曾て隣村と合村ニ成りし節も殊更厚く禮義を盡し決して驕奢偷安ニ日を送り横恣僭上なる振舞無き様と懇

々相誠めげざるより風俗も次第に改良せり且村内に眼病を
煩ひし者數多あり何れも貧困のことなれは良醫の治療を乞
ふ能はずして非命に死するを憫みて明治六年の頃に醫局を
取設け府下病院より醫員を雇入れ其入費は總て自費にて賄
ひ茂兵衛へも醫業を學ばせて専ら施療せしめしかば追々治
療を受る者多くなりて死するもの少くなりしとる斯く元右
衛門の職務に勉勵し人民を救助することとを褒賞ありて一昨
年官より二圓金を賜はれしと云ふ

○貞婦三代川松の記事

下總國葛飾郡冬田村の平民三代川音次郎の妻松(五十年餘)を

元と東京銀座二丁目の鳶職信藤八五郎の娘ふて嘉永二年の
頃該家窮迫せしふより葛飾郡船橋驛の飯盛女となり同五年
その年季も明けしことなれは音次郎の妻となり鮮渡世をし
て居ちりしか慶應三年より其夫音次郎(年六十餘)ハ半身不隨
の病ふ罹り爾來臥すこと數年なりしも松の療養を盡すこと
ハ益々惻切ふして元來音次郎ハ家貧しく其日の糊口ふも
差支けれと平素魚肉を好み且へ心神昏迷して自らるの貧苦
と打ち忘れ嗜欲常をかりしかハ松ハ其養女曾能と相議りて
同人を農家ふ傭役せしめ其給金を資本とし自から菓物蒸菓
子等を賣り歩行き些少の利を得て藥餌ふ充て且つ毎日の食

ふハ必らず其嗜む所の物を飽かしめざるハかゝし殊ハ入浴の
節ハ自ら背負ふて混堂ゆやハ趣き沐浴もくよくせしむる杯して久しき
間を一日も怠る氣色なく介抱かいほうすれど遂に去る明治六年八月
其夫死去せしげれハ松の哀悼あいさうやる方なく自身ハ纏まとふどころ
の衣類迄も賣却さいぎやくし纔かハ葬事さうじを營みしより昨年官より其
篤志とくしを賞し金圓を下賜されしとぞ

一本誌定價三錢五厘○十冊以上ハ一割引○三十冊以上ハ一
割五分引○六十冊以上ハ二割引
右前金投與アラハ直ニ送達ス尤府外ハ郵便税ヲ受ク但諸
事務ハ博聞社ニテ取扱候事

社長兼印刷人 長尾景彌
編輯人 杉村雄二

東京愛宕下町三丁目
博聞社
本局 加賀國金澤町
益知館

賣 捌 所

西京古門前三吉町	博聞分社
大坂心齋橋通南 久太郎町南入	全分社
千葉縣下寒川	全分社
埼玉縣下浦和驛	全分社
東京常磐橋前	全支店
同 藥研堀町	報知社
加賀國金澤上堤町	中村喜平
同 安江町	近田太平
同 堤町	野島信吉

野島信吉
 近田太平
 中村喜平
 報知社
 全支店
 全分社
 全分社
 全分社
 博聞分社

